香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 4

―― 平成６年度 ――

1995. 3

香 芝 市 教 育 委 員 会

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 4

— 平成 6 年度 —

例　　言

1．本書は香芝市教育委員会（香芝市二上山博物館）が平成６年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。本書には、国庫補助金対象事業以外の民間開発事業（受託事業含む）及び公共開発事業に伴う13件の埋蔵文化財発掘調査の概要を収録している。

　なお、国庫補助金対象事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要については『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報３』に収録している。

2．調査は、下記の組織で実施した。

（１）現地調査

〔調査員〕　山下隆次、奥田昇、下大迫幹洋（香芝市二上山博物館学芸員）

〔作業員〕　藤田一夫、堀川四郎、吉岡藤雄、古山亨、森統、矢野達生、山野恵三

〔補助員〕　井上克子、前川利江、島田良子、田中久美子、山口剛（奈良大学学生）

（２）事　　務

香芝市教育委員会事務局

社会教育課　二上山博物館

3．本書の執筆は、それぞれの調査担当者が執筆し、目次および文末に文責を明記した。

〔執　筆〕　山下、下大迫

〔製　図〕　田中、下大迫

〔編　集〕　下大迫

4．各遺跡の調査記録、出土遺物等は香芝市二上山博物館（所轄）で保管している。

5．本概報作成に関しては青木勘時氏（天理市教育委員会）より有益なご教示を得ました。記して感謝致します。

本 文 目 次

1．尼寺廃寺跡の調査…… 1

（1）尼寺廃寺跡第5次調査……（山　下）… 1

（2）尼寺廃寺跡第6次調査……（山　下）… 2

2．藤ノ木丁遺跡の調査…… 3

（1）藤ノ木丁遺跡第12次調査……（山　下）… 4

（2）藤ノ木丁遺跡第13次調査……（山　下）… 4

（3）藤ノ木丁遺跡第14次調査……（山　下）… 4

（4）藤ノ木丁遺跡第15次調査……（下大迫）… 5

（5）藤ノ木丁遺跡第16次調査……（山　下）… 7

3．藤山遺跡第4次調査……（山　下）… 8

4．今泉遺跡第2次調査……（下大迫）… 10

5．岡氏居館跡遺跡第2次調査……（下大迫）… 13

6．顕宗陵古墳第2次調査……（下大迫）… 16

7．遺物散布地第1次調査……（下大迫）… 18

8．鎌田遺跡第8次調査……（下大迫）… 19

図　目　次

図1　香芝市の位置

図2　平成6年度発掘調査地位置図（S＝1／50,000）

図3　尼寺廃寺跡調査地位置図…… 1

図4　藤ノ木丁遺跡調査地位置図（S＝1／6,000）…… 3

図5　第15次調査遺構平面図（S＝1／200）…… 6

図6　藤山遺跡調査地位置図…… 8

図7　調査トレンチ位置図…… 9

図8　今泉遺跡調査地位置図（S＝1／6,000）…… 10

図9　第2次調査遺構平面図（S＝1／100）…… 11

図10　香芝市周辺の中世城郭等分布図…… 13

図11　岡氏居館跡遺跡調査地位置図（S＝1／6,000）…… 14

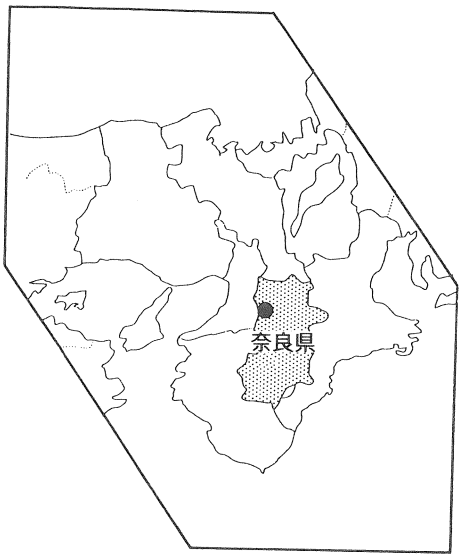
図12　調査地位置図（S＝1／5,000）…… 16
図13　調査地位置図（S＝1／5,000）…… 18
図14　鎌田遺跡調査地位置図（S＝1／6,000）…… 19
図15　鎌田遺跡第8次調査遺構平面図・土層断面図（S＝1／100）…… 21～22
図16　縄文土器実測図（S＝1／4）…… 24
図17　SD－01最上層出土土器実測図（S＝1／4）…… 24
図18　SD－01上層出土土器実測図（1）（S＝1／4）…… 25
図19　SD－01上層出土土器実測図（2）（S＝1／4）…… 26
図20　SD－01上層出土土器実測図（3）（S＝1／4）…… 27

表　目　次

表1　平成6年度発掘調査地一覧（国庫補助金対象事業以外）
表2　鎌田遺跡第8次調査出土土器観察表…… 30～32

図 版 目 次

図版1　尼寺廃寺跡第6次調査
図版2　藤ノ木丁遺跡第12次・13次・14次調査
図版3　藤ノ木丁遺跡第15次調査
図版4　藤山遺跡第4次調査
図版5　今泉遺跡第2次調査
図版6　岡氏居館跡遺跡第2次調査・顕宗陵古墳第2次調査・遺物散布地第1次調査
図版7　鎌田遺跡第8次調査（1）
図版8　鎌田遺跡第8次調査（2）
図版9　鎌田遺跡第8次調査出土土器（1）
図版10　鎌田遺跡第8次調査出土土器（2）



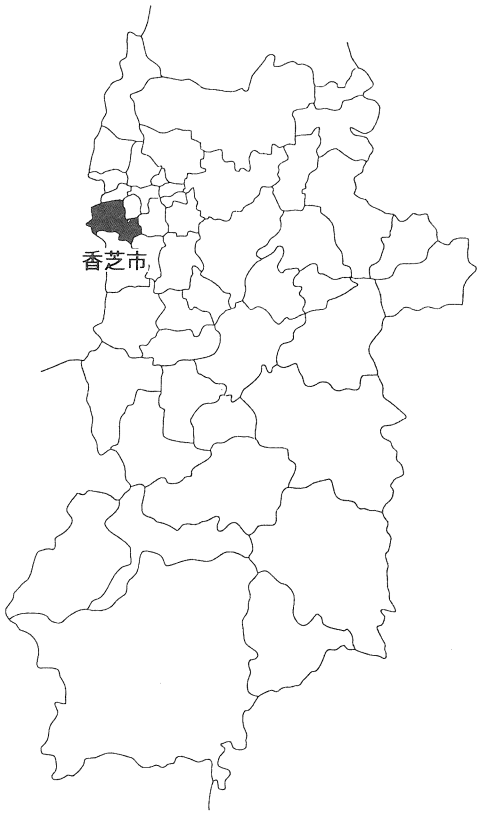


図1　香芝市の位置

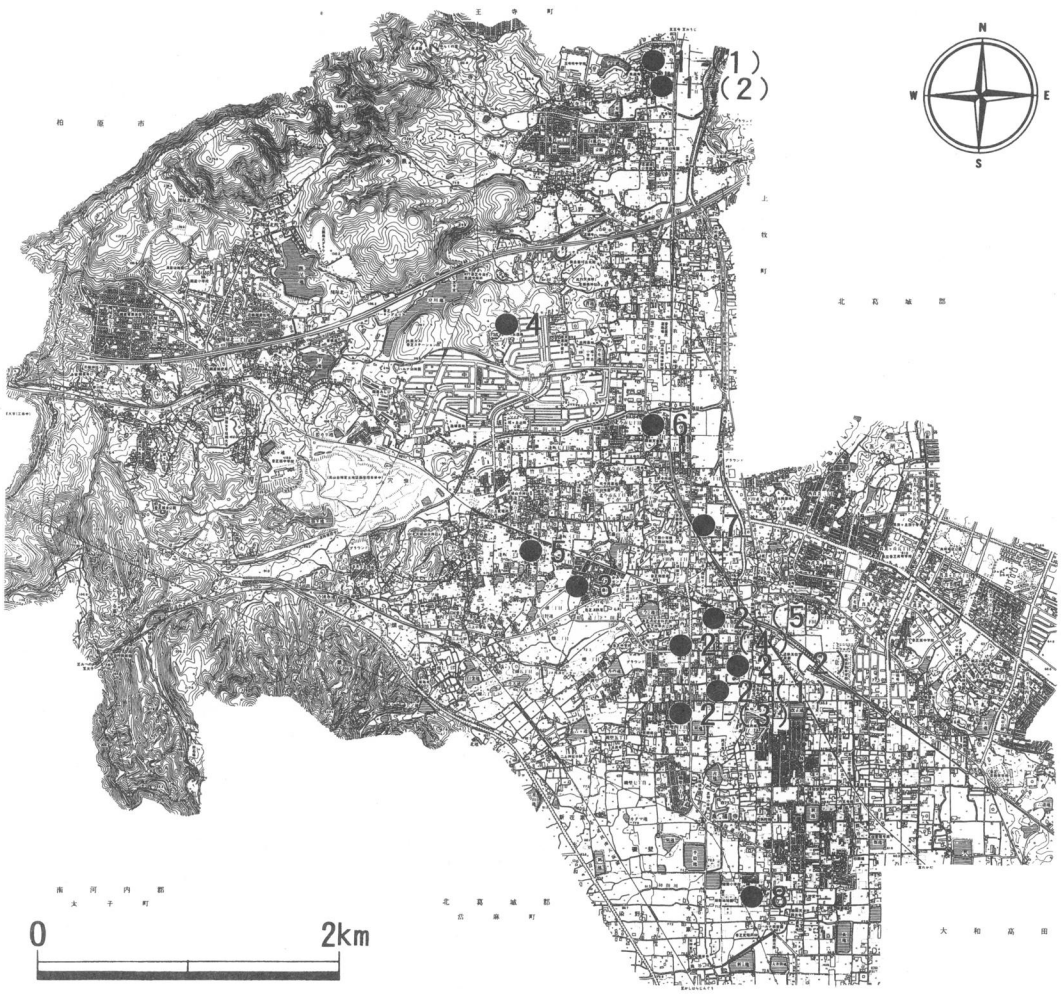


図２　平成６年度発掘調査地位置図（Ｓ＝１／50,000）

表１　平成６年度発掘調査地一覧（国庫補助金対象事業以外）

No.	遺　跡　名	調査次数	調　査　地	調査期間	開発内容	調査面積
１－(1)	尼寺廃寺跡	第５次	尼寺２丁目101番地	平成６年 ４／１～５／10	分譲住宅建築	100㎡
１－(2)	尼寺廃寺跡	第６次	尼寺２丁目99番1,2,3	10/26～11/25	宅地造成	80㎡
２－(1)	藤ノ木丁遺跡	第12次	狐井131－1	６／７	分譲住宅建築	19㎡
２－(2)	藤ノ木丁遺跡	第13次	狐井231,232－1	６／21	宅地造成	16㎡
２－(3)	藤ノ木丁遺跡	第14次	磯壁４丁目146,147－1	８/23～８/25	宅地造成	72㎡
２－(4)	藤ノ木丁遺跡	第15次	磯壁３丁目51－1,52－1	９/６～９/24	店舗建築	125㎡
２－(5)	藤ノ木丁遺跡	第16次	下田４丁目149番地	11/９～11/10	宅地造成	30㎡
3	藤山遺跡	第４次	逢坂１丁目374－1他10筆	10/27～11/10	福祉会館建設	167㎡
4	今泉遺跡	第２次	今泉1200－1	11/10～12/10	鉄塔建設	83㎡
5	岡氏居館跡遺跡	第３次	逢坂２丁目694 －2,－4,－5,－7	平成７年 １/24～２/１	分譲住宅建築	75㎡
6	顕宗陵古墳	第２次	北今市４丁目317－1番地	２/17	分譲住宅建築	34㎡
7	遺物散布地	第１次	下田東１丁目500－1	２/13	共同住宅建築	28㎡
8	鎌田遺跡	第８次	鎌田354－1,354－3	３/15～３/26	集合住宅建設	130㎡

1　尼寺廃寺跡〔第５・６次〕の調査

尼寺廃寺跡は香芝市尼寺に所在する寺院跡である。古くから尼寺の集落内で縄目や布目のついた古瓦が多数出土することから古代寺院跡の存在が考えられ、その所在する地名から尼寺廃寺跡と呼ばれている。古瓦は大きく南北２つの地域に分布の中心がある。北の地域は礎石が残る基壇状の高まりを中心に分布している。南の地域は役行者をまつる薬師堂を中心に古瓦が分布している。この薬師堂には原位置を保つと考えられる礎石がいくつか残っており、また、その西約50ｍにある般若院境内でかつて多くの軒瓦が出土したことから、伽藍がこの周辺に存在したと推定されている。

この北の基壇状の高まりと南の薬師堂とは直線距離にして約200ｍ離れていることや、北と南の地域のほぼ中央に谷が存在し、谷筋ではほとんど古瓦が出土しないことから、尼寺廃寺跡を１つの寺院跡ととらえず南北２つに分けて考えられ、それぞれ尼寺廃寺北・南遺跡と呼ばれている。

（１）　尼寺廃寺跡第５次調査

Ⅰ　調査の概要

調査地は尼寺廃寺北遺跡の南端にあたり、塔跡と推定されている基壇から南へ約60ｍ、南面回廊推定地から南へ約30ｍの地点である。調査地西側の法面はすでに造成工事に先立って擁壁工事が行われており、それに伴う排土が調査地に盛り上げられている状態であった。この擁壁工事によって削られた南北約40ｍの法面で土層の堆積状況を観察すると、第１層が暗灰色土（耕作土）、第２層が黄褐色土（水田床土）、第３層が茶褐色土（整地層）、第４層が青灰色粘質土（地山）となっており、断面において柱穴等の遺構は確認できなかった。また、遺物も瓦片が十数点出土している程度であった。

調査は５月30日に実施した。調査地の東側で南北10ｍ、幅１ｍのトレンチを設定して掘削を開始した。その結果、西側の擁壁部分の土層と全く同じ土層で、第３層及び第４層上面で遺構は検出されなかった。また、遺物も全く出土しなかったため、同日午後に埋め戻して調査を終了した。

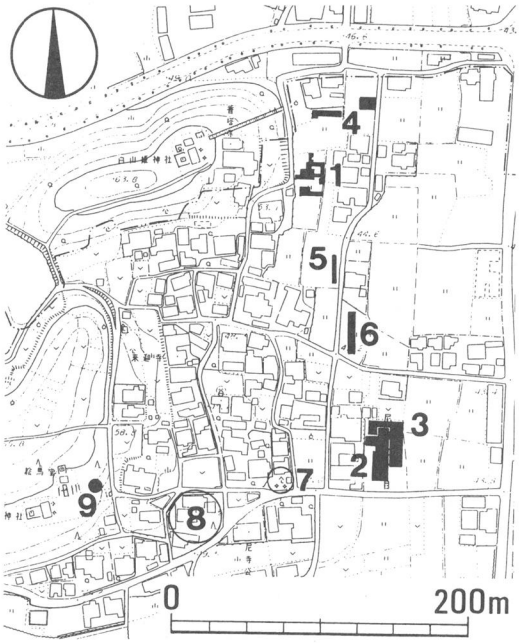


図３　尼寺廃寺跡調査位置図

１～６は調査次数を示す　　７　薬師堂
８　般若院　　９　尼寺窯

Ⅱ　まとめ

今回の調査では遺構は検出されなかった。擁壁工事の際に出土した遺物も後世の整地等で付近から運ばれてきたものと考えられる。　（文責　山下）

（２）　尼寺廃寺跡第６次調査

Ⅰ　調査の概要

今回の発掘調査は、宅地造成工事のため平成６年10月13日付けで施主から発掘届出書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が施主と協議をおこない、発掘調査を実施することになった。

調査地は尼寺廃寺北遺跡と南遺跡のほぼ中間の谷部分にあたり、かつて調査地の南側において川が西から東へ流れていたと地元で言い伝えられているところである。また、北遺跡の塔跡と推定されている基壇から南へ約70ｍ、南面回廊推定地からは南へ約40ｍの地点である。

調査は10月26日から開始した。草刈り後、調査地のやや西よりに４ｍ×20ｍのトレンチを南北方向に設定し、重機で掘削を開始した。トレンチ南側では第１層が暗灰色土（耕作土）、第２層が黄褐色土（水田床土）、第３層が茶褐色土（整地層）、第４層が砂層、第５層は植物が腐植した茶褐色土、そして、第６層が小石を含む砂層となっていた。このうち第３層から大量の須恵器片や土師器片等の土器片や瓦片が出土した。また、第６層は明らかに川床と考えられる堆積で、トレンチ南端から北へ約５ｍのところで川岸が検出された。この川跡はトレンチ内で幅約５ｍ検出しており、トレンチ南端の川床の状況から推測すると幅10ｍ以上になると思われる。

遺構については、トレンチの北側でほぼ完形の須恵器長頸壷が出土し、平面を精査したところ井戸であることがわかった。この井戸の上面からは須恵器長頸壷２点のほか土師器坏蓋１点、土師器甕２点などが出土した。そして、井戸の中層からは土師器坏２点が出土し、うち１点に墨書があった。この井戸は素掘りの方形で、一辺約1.2ｍ、深さ約２ｍであった。

なお、床面の中央に直径約20㎝、深さ約５㎝のピットがあり柱が存在していた可能性がある。そして、写真撮影のあとトレンチ平面図等を作成し、11月26日に埋め戻しを完了して調査を終了した。

Ⅱ　まとめ

今回の調査において大きな成果があった。まず、川跡が検出されたことによって、従来の推定通り尼寺廃寺跡が北と南に分かれる寺院跡であることが確実となった。

また、素掘りではあるが井戸が検出され、出土した土器が奈良時代であることから、この付近に寺院に関連する何らかの施設があったことが推測される。今後、周辺地域の調査が進めば当時の状況がよりいっそう解明されるであろう。　（文責　山下）

２　藤ノ木丁遺跡〔第12～16次〕の調査

藤ノ木丁遺跡は香芝市の中央部、香芝市磯壁から狐井にかけて広がる古墳時代を中心とする遺跡である。昭和63年度の第１次調査で古墳時代中期から後期にわたる数条の流路とともに大量の遺物が出土したことからその存在が明らかとなった。

遺跡は、二上山麓東部から緩やかに派生する二上扇状地の先端部から大和川の一支流である葛下川沿いに形成された沖積低地上を中心に展開しており、遺跡の北西約700ｍの丘陵上には古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物群から成る藤山遺跡が、南約500ｍの狐井丘陵には古墳時代中期の大型前方後円墳である狐井城山古墳（全長約140ｍ）が所在する。

当遺跡では、近年の開発増加に伴い、これまで11次の発掘調査が実施されており、なかでも平成５年度の第７次調査では、落ち込み状遺構から弥生時代後期の土器が一括出土するなど徐々に遺構や遺物の分布域等遺跡の範囲が把握されつつある。

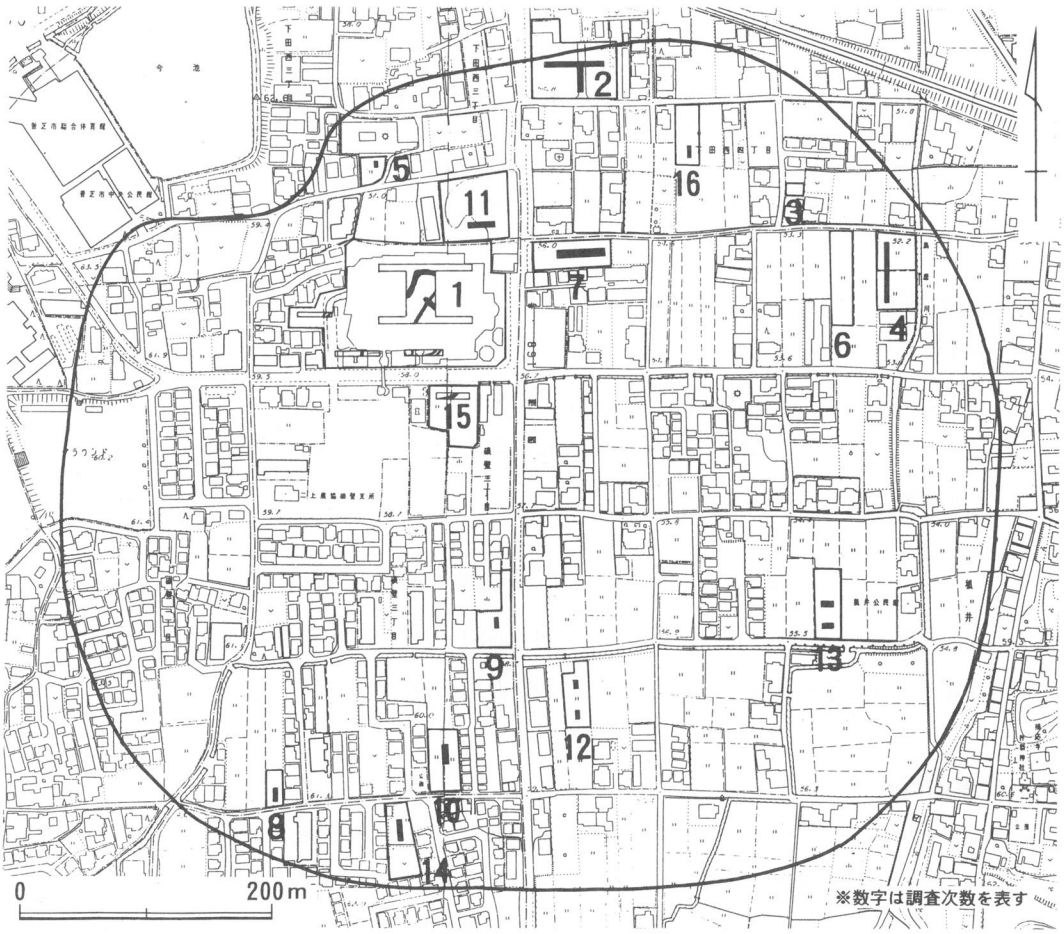


図４　藤ノ木丁遺跡調査地位置図（Ｓ＝１／6,000）

2－(1)　藤ノ木丁遺跡第12次調査

調査地：狐井131－1　　調査原因：分譲住宅建築

調査期間：平成6年6月7日　　調査面積：約20㎡

Ⅰ　調査の概要

調査地の中央部分に4ｍ×40ｍのトレンチを南北方向に設定し、重機で北から掘削を開始した。しかし、第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が中近世と考えられる整地土、第4層が地山となっており、遺構の存在が考えられる第3層及び第4層の上面を精査したが、遺構は検出されず遺物も皆無であった。そのため、トレンチの掘削を北から4ｍの地点で中止した（第1トレンチ）。そこで、調査地の中央、及び南側において遺構・遺物の有無を確認するためトレンチを設定して掘削した（第2・3トレンチ）。しかし、結果は第1トレンチと同じ状況で、遺構・遺物は検出されなかった。　（文責　山下）

2－(2)　藤ノ木丁遺跡第13次調査

調査地：狐井231，232－1　　調査原因：宅地造成

調査期間：平成6年6月21日　　調査面積：約16㎡

Ⅰ　調査の概要

調査地南側の宅地計画部分で2ｍ×4ｍのトレンチを2カ所設定して調査した。その結果、これまでの調査と同様、第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が中近世と考えられる整地土、第4層が地山となっていた。遺構の存在が考えられる第3層及び第4層の上面を精査したが、遺構は検出されず遺物も皆無であった。　（文責　山下）

2－(3)　藤ノ木丁遺跡第14次調査

調査地：磯壁4丁目146，147－1　　調査原因：宅地造成

調査期間：平成7年8月23日～8月25日　　調査面積：約72㎡

Ⅰ　調査の概要

調査地の中央に4ｍ×18ｍのトレンチを設定して調査した。その結果、土層の堆積はこれまでの調査と同じで、遺構も検出されなかった。しかし、中近世の整地土と考えられる第3層から若干の遺物が出土した。しかし、細片のため帰属時期等は不明である。　（文責　山下）

2－(4)　藤ノ木丁遺跡第15次調査

Ⅰ　調査の概要

調査は、店舗建設のため平成6年8月20日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。当調査地は古墳時代の流路跡から大量の遺物が出土した昭和63年度の第1次調査地[1]の南へ約10mの地点で、何らかの遺構が検出される可能性が高い地域であったため、第1次調査地に近い開発区域中央部よりやや北側に南北幅5m、東西長さ25mの試掘調査区を設定して掘削を開始したところ、第1次調査地と同様の洪水砂層を確認し、流路跡を1条検出したため、試掘調査区の南北幅をそのまま拡張して河道の検出を主眼とした本格的な発掘調査へ移行した。

調査は平成6年9月6日～同年9月24日まで実質10日間に亘って実施し、調査総面積は125㎡であった。

(1) 層序

調査区域の基本層序は、以下の通りである。

第1層　暗灰色砂質土層　〔層厚12cm〕(現代耕作土)
第2層　黄褐色砂質土層　〔層厚8cm〕(現代耕作土床土)
第3層　灰褐色砂質土層　〔層厚18cm〕(第2層との層界中にマンガン班粒を含む)
第4層　灰褐色砂質土層　〔層厚10cm〕(粗砂～小礫混じり)
第5層　褐灰色砂質土層　〔層厚18cm〕(中世素掘溝検出面)
第6層　暗茶褐色砂質土層〔層厚10cm〕(細粒砂含む)
第7層　暗茶褐色粘質土層〔層厚20cm〕(堅緻)
第8層　黄褐色粘質土層　〔層厚95cm〕(基盤層)

このうち遺物を包含するのは第3～5層で、中世後半の瓦器皿や羽釜の細片数点が出土したが、各層中とも遺物の包含は少なく、古墳時代の遺物としては古墳時代後期に相当するTK－209型式期の須恵器坏身(口縁部)細片1点のみであった。

(2) 検出遺構

第5層上面で中世の素掘溝群を検出したが、時間的な都合上、付近一帯の基盤層である第8層上面での精査を実施したところ、調査区西側隅から中央部にかけて南西から北東方向に流れる流路1条(SD－01)を検出した。

【SD－01】(図5)

流路の平均幅は、5.2m、深さは中央の最深部で約1.7mを測り、断面形態はU字形を呈する。

流路は調査区中央部で南東から北側方向に大きく流れを変える。流路内の堆積土は、部分的に細～中粒の砂層を介在させるものの、そのほとんどが中粒～粗粒の砂礫層で埋積されており、あまり時を隔てずして一気に埋没したものと思われる。

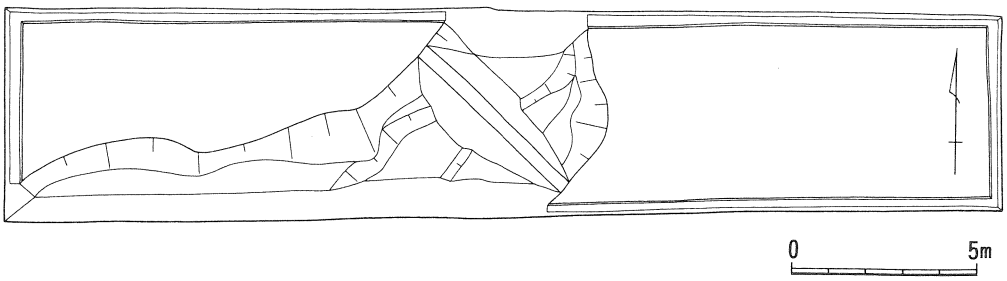


図５　第15次調査遺構平面図（Ｓ＝１／200）

流路跡からの出土遺物は皆無であったため、明確な帰属時期は不明であるが、近接する第１次調査や第７次調査で検出された流路の堆積状況や堆積土質が酷似しており、おおむね、これらの流路の廃絶時期と同様に古墳時代中頃に埋積された自然流路跡と推定される。

Ⅱ　まとめ

当初の予想どおり、地形に沿って南西から北東方向に流れる流路跡１条を検出した。しかし、この流路以外は遺構は検出されず、また、藤ノ木丁遺跡の中心部分と考えられていた当地域は遺物の分布密度も極めて低いことが判明した。

これまでの調査結果から、弥生時代や古墳時代等の何らかの遺構や遺物が検出された地域は第１次調査地で検出された流路の流れる南西から北東方向に限られており、この流路の流れる方向を中心に遺構や遺物が検出されている。従って、おそらく、集落の中心は、これらの流路の上流の二上山麓から緩やかに派生する西方の扇状地域付近に展開しているものと思われ、今後、あまり発掘調査の進展していない藤ノ木丁遺跡の西側地域付近を留意していく必要がある。

（文責　下大迫）

註　記

（１）佐藤良二・青木勘時　1989　『藤ノ木丁遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会

２－（５）　藤ノ木丁遺跡第16次調査

調査地：下田西４丁目149番地　　調査原因：宅地造成

調査期間：平成６年11月９日～11月10日　　調査面積：約30㎡

Ⅰ　調査の概要

遺跡範囲の北端における調査は、今回が初めてであった。調査は、調査地の南西部に３ｍ×10ｍの南北トレンチを設定して掘削したが、遺構や遺物は検出されなかった。　（文責　山下）

3　藤山遺跡第４次調査

Ⅰ　遺跡の位置と環境

藤山遺跡は通称「藤山丘陵」とよばれる標高約60ｍ前後の丘陵を中心に所在する。これまで３次にわたる調査が行われている。まず、丘陵南部でふたかみ文化センター建設に伴って第１次調査（平成２年度）が実施された。その結果、古墳時代後期の掘立柱建物群や柵列と推定される遺構などが検出された。[1] しかし、第２次調査（平成３年度）、第３次調査（平成５年度）においては遺構や遺物は検出されなかった。

また、遺跡の北方の同じ丘陵上には藤山・北今市古墳群が存在する。藤山古墳群は横穴式石室と家形石棺直葬を主体とし、北今市古墳群は５基（１基は消滅）のうち１基が小石室を主体とすることから古墳時代後期に築造されたと考えられている。[2]

この第１次調査において検出された掘立柱建物群が、藤山・北今市古墳群の築造時期と一致することから、両者を「居住地と奥津城」の関係にあった可能性が推測されている。もし仮にこの関係が成り立つならば、その勢力範囲内に大坂道の主要道であった穴虫越えの道が通っている。穴虫越えの道は古代における東西交通の要衝であり、軍事的にもきわめて重要なルートであった。このことから、藤山遺跡の建物群を造営した集団の背後には強力な権力者の存在が考えられ、その強力な権力者として非蘇我系の敏達・押坂彦人大兄皇子系の一族が想定されている。[3]

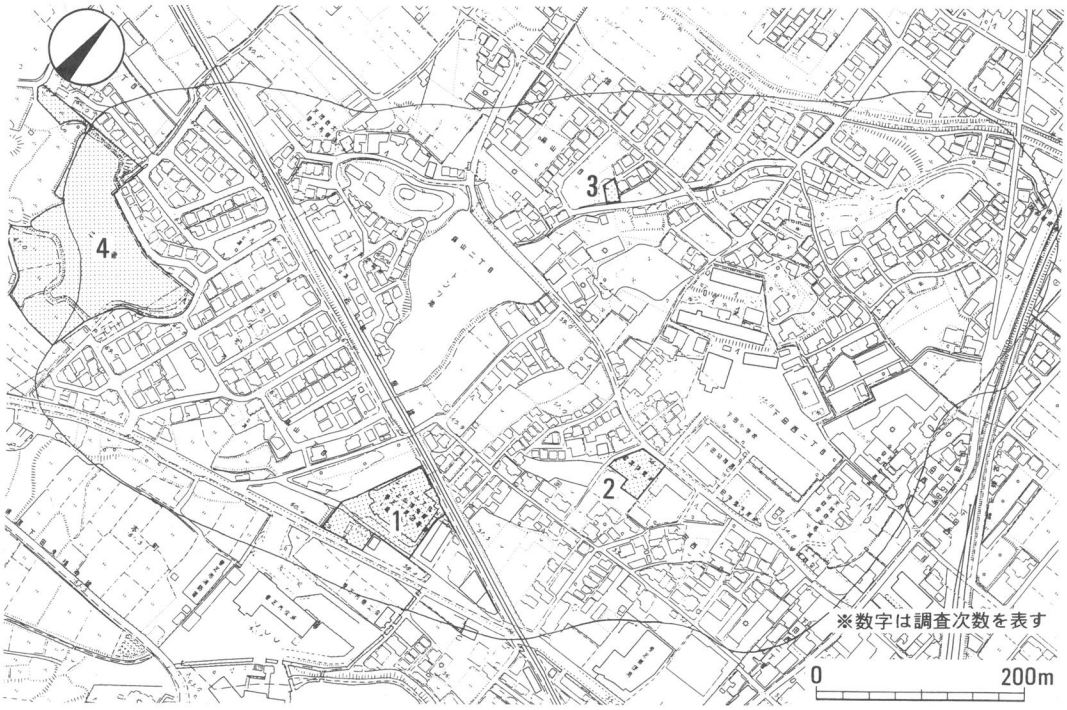


図６　藤山遺跡調査地位置図

Ⅱ　調査の概要

今回の発掘調査は、（仮称）総合福祉会館建設のため平成6年5月12日付けで香芝市長から発掘通知書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が市の担当部局と協議して発掘調査を実施することになった。

調査を実施するにあたっては、調査地が池の中でまだ水が若干残っていることから、湧水の影響がない部分にトレンチを設定し、人力で掘削することにした。

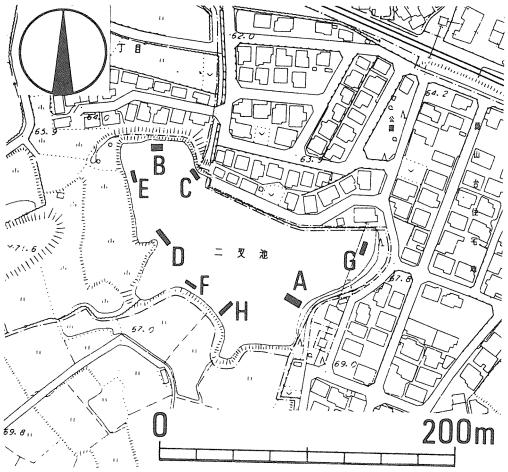


図7　調査トレンチ位置図

調査は10月27日から開始した。

まず、池の東側に4ｍ×10ｍのトレンチ（Ａトレンチ）を設定して掘削を開始した。その結果、堤防側では現地表面から約50㎝、池側では約5㎝で地山となった。そして、遺構・遺物は全く検出されなかった。土層を観察すると侵食によって堤防が削られて堆積した土層のみであった。

次に、北西部に4ｍ×5ｍのトレンチ（Ｂトレンチ）を設定して掘削したが、結果はＡトレンチと同じであった。そして、可能な限りトレンチを設定して掘削したが（Ｃ～Ｈトレンチ）結果はすべて同じであった。最終的に調査面積は167㎡となった。そして、11月10日に調査を終了した。

Ⅲ　まとめ

今回の調査は遺跡の西端でしかも池の中ということもあって、堤防が侵食されて堆積した土層のみで、遺構や遺物は検出されなかった。なお、Ｄトレンチにおいては堤防の基底部が検出された。この堤防はかつてＤトレンチから北東方向に存在し、現在1つになっている二又池を2つに分けていた堤防である。

今後、周辺地域の調査が進めば正確な遺跡の範囲や性格が判明するであろう。　（文責　山下）

註　記

（1）佐藤良二編　1991　『藤山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
（2）泉森　皎　1976　「古墳時代」『香芝町史』
（3）塚口義信　1992　「奈良県香芝町藤山遺跡をめぐる二、三の憶説」『阡陵』関西大学考古学等資料室

4　今泉遺跡第２次調査

Ⅰ　遺跡の位置と環境

今泉遺跡は香芝市今泉の集落西方、明神山（標高約274.9ｍ）を頂部として南東方向へ緩やかに派生する標高約137ｍ前後の丘陵上に位置するサヌカイト製石器の散布地である。

遺跡は、香芝市内をはじめ、奈良盆地東辺や北葛城郡域をほぼ一望に見渡すことのできる視界の開けた高台に立地しており、遺跡周辺の二上山麓の丘陵上には逢坂城跡やヘモンド塁などの中世の城郭遺跡が集中して分布する。

当調査地の西方約100ｍで実施した平成５年度の第１次調査では遺構や遺物は未検出であったが、南東約600ｍの地域では昭和60年に大規模な区画整理事業に伴う発掘調査が実施されており、上中ヨロリ１・２号墳などの２基の古墳をはじめ弥生時代中期の土器片や奈良時代の土器片などが検出されている。[1)]

当調査地は、眼下に太子葬送の道（太子を偲ぶ道）等の古代からの大和と河内を結ぶ主要街道を見下ろし、馬見丘陵東辺を見渡すことのできる高台に位置することから、弥生時代の高地性集落や中世の城郭等にかかわる何らかの遺構や遺物が検出される期待がもたれた地域である。

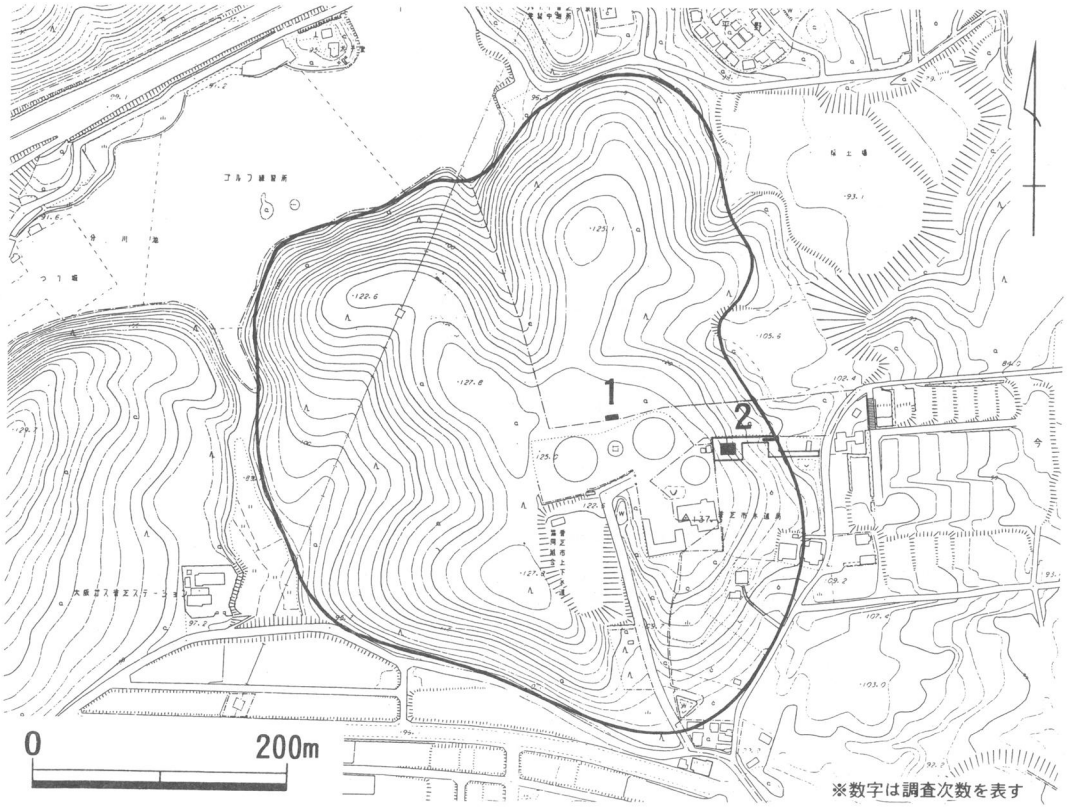


図８　今泉遺跡調査地位置図（Ｓ＝１／6,000）

Ⅱ　調査の概要

（1）調査の契機と経過

調査は、鉄塔建設および中継局舎建設のため、平成６年10月５日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。地下遺構が存在した場合、鉄塔建物基礎埋設に伴う埋蔵文化財の破壊行為は必至とみられたため、事業者と協議を行い、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、丘陵頂部斜面上の鉄塔建設地に東西５ｍ、南北２ｍの第１調査区と、丘陵下の局舎建設地に東西10ｍ、南北２ｍの第２調査区の合計２箇所に調査区を設定して遺構や遺物の有無確認のための試掘調査から実施した。第１調査区で溝状の落ち込み状遺構を検出したため、試掘調査区をそのまま東西７ｍ、南北９ｍに拡張して溝状遺構の検出を主眼とした発掘調査へ移行した。

現地調査は平成６年11月10日～同年12月１日まで実質９日間に亘って実施し、第１・２調査区併せた調査総面積は83㎡であった。

（2）層序

第１調査区の基本層序は以下の通りである。

第１層　暗茶色腐葉土層　〔層厚15㎝〕（現代果樹園の表土）

第２層　暗灰褐色砂質土層〔層厚20㎝〕（風化堆積土層）

第３層　明灰褐色砂礫土層　　（粘土礫塊状土質）

（3）検出遺構（図９）

第２調査区は、段丘丘陵の平担部に位置するため、ほぼ平担であるが、第１調査区は丘陵の頂上付近からやや下った丘陵斜面に位置するため、傾斜が強く、丘陵頂上付近の調査区南側と丘陵下方の谷側に位置する調査区北側との比高差は約2.5ｍを測る。

第２調査区では遺物の散布は認められず、遺構も皆無であったが、第１調査区の第３層の明灰褐色砂礫土層上面で丘陵の傾斜面を現況地形に沿って調査区の南西方向から北東方向に流れる流路跡３条を検出した。

流路は調査区南西の上流から調査区北東の下流に下るにつれて水流の浸食作用によって幅が広く、深くなっており、３条が合流する下方の谷部付近の合流部での最大幅は８ｍ、最深部の深さは検出面から80㎝を測る。

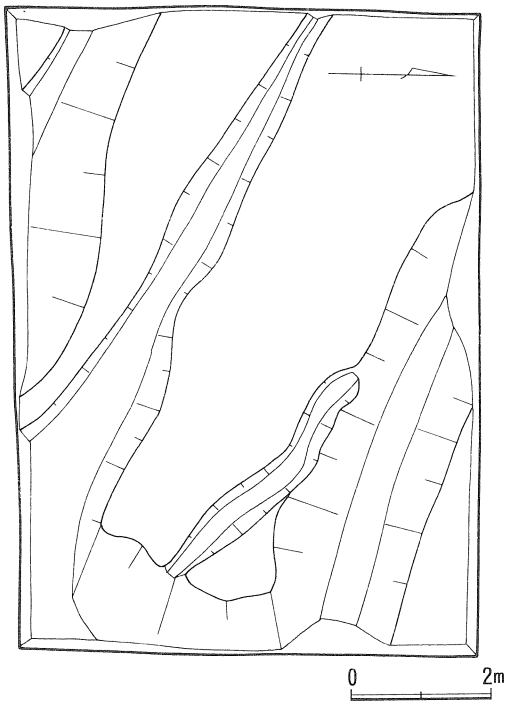


図９　第２次調査遺構平面図（Ｓ＝１／100）

流路内はいずれも地山である明灰褐色砂礫土層の単一土層で埋積されており、流路内からは時期不明の土師器細片５点とサヌカイト製石器の剥片１点が出土した。

流路の断面の形態や地形的な環境から人為的に掘削された流路跡とは考えられず、丘陵頂部から谷間にかけて流出する水流の浸食作用によって自然に形成された流路跡と考えられる。

Ⅲ　まとめ

平成５年度に実施した今泉遺跡第１次調査地では表土直下は硬い岩盤の基盤層であったが、当調査地ではこの岩盤層は表土直下では検出されず（表土１ｍ下でも未検出）、上層には完全に岩質化しない粘土礫塊状土質が風化・土壌化した軟質の砂質土層が丘陵東部域上層を形成していることが判明した。

当初は、旭ケ丘土地区画整理事業に伴う発掘調査の際に弥生時代中期の土器片が採集されていることや、また、何よりも高台に位置するという立地条件から、当丘陵上で弥生時代の高地性集落や中世から近世にかけての城跡にかかわる何らかの遺構や遺物が検出される期待がもたれたが、これらの遺跡に関連する遺構や遺物は検出されず、時期不明の自然流路跡を検出するにとどまった。

しかし、現地調査中に今回の調査地より南へ約100ｍ離れた同丘陵南東斜面で骨蔵器と推定される奈良時代後半の須恵器短頸壺（口頸部）と土師器皿（口縁部）破片１点を表面採集しており、新たに当丘陵上には火葬墓が存在する可能性が濃厚となった。

地形的、立地条件的には今回の調査地より南方の緩傾斜面が二上山北東山麓や奈良盆地南東方面への視界が開けており、また、北葛城郡域を貫く平野部内の各種主要街道が交差して河内へ至る二上山北麓沿いの主要街道を望む好所に位置することから、将来、この緩傾斜面で火葬墓等の何らかの遺構や遺物が検出される可能性がある。　（文責　下大迫）

註　記

（１）佐藤良二　1986　『旭ヶ丘Ⅰ－土地区画整理事業に伴う昭和60年発掘調査概報－』香芝町旭ヶ丘土地区画整理事業組合・香芝町教育委員会編

5　岡氏居館跡遺跡第 2 次調査

Ⅰ　遺跡の位置と環境

岡氏居館跡遺跡は、中世中頃から後半にかけて現在の香芝市中南部を中心に北葛城郡域に勢力基盤を有していた岡氏の居館跡推定地である。

遺跡は、地形的には二上山北東および東麓から北東方向に緩やかに派生する畑扇状地（二上扇状地）の先端地域にあたり、地質的には付近の基盤層は、堅緻な粘質土やシルト層、砂礫層で構成される大阪層群相当層で形成される。

遺跡の所在する二上山北麓は、堺街道や長尾街道、太子葬送の道（太子を偲ぶ道）などの大和と河内を結ぶ主要街道が縦横に交差しており、古くから大和と河内を結ぶ交通の要衝の地として重要視されてきた地域である。これらの主要街道を見下ろす丘陵上には、中世の城郭関連遺構と推定されている逢坂城やヘモンド塁（土塁）が、そして、当遺跡の南西約1.2kmの二上山雄岳の山中には、岡氏累代の戦時下の居城と推定される岡城や1541年に木沢長政によって本格的に築造され、後に松永氏が占有したとされる二上山城などの郭や土塁を備えた山城が数基所在する。[1)]

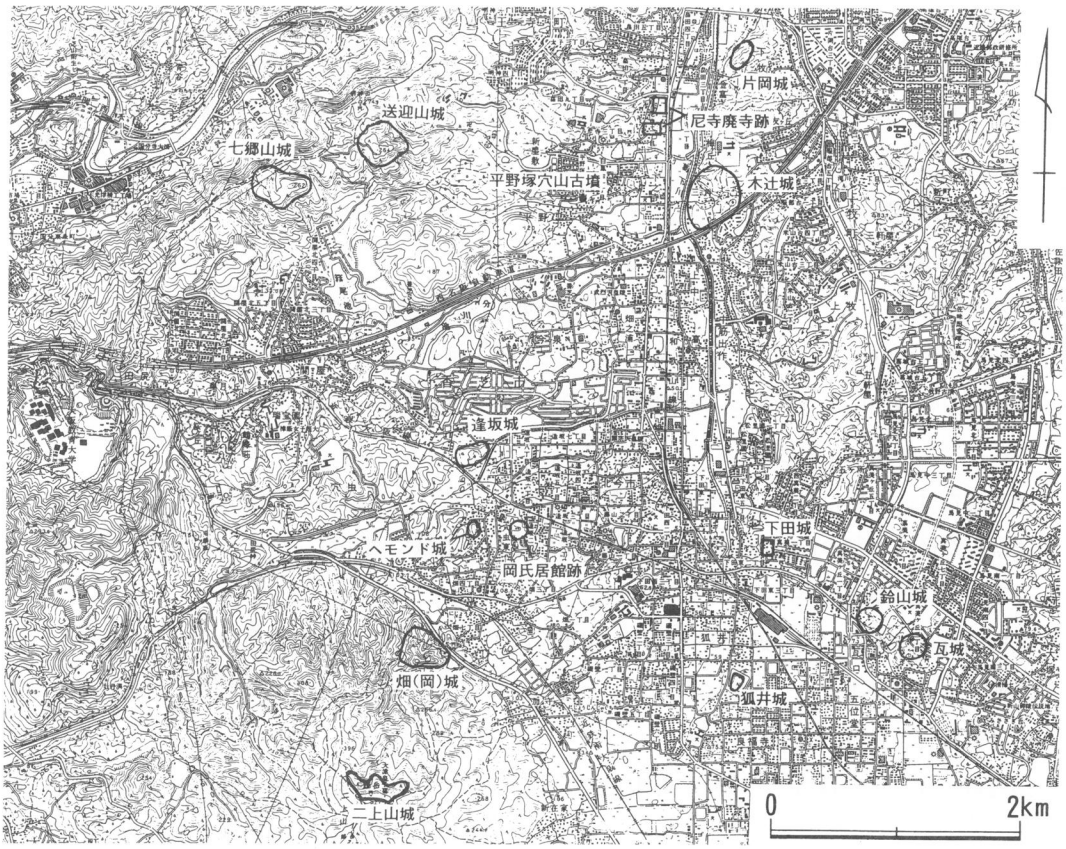


図10　香芝市周辺の中世域郭等分布図

居館跡推定地の周辺には城前や土井ノモトなどの何らかの城郭の囲繞施設に関連した小字名が残っており、現況でも居館跡推定地の北東側や西側には館を取り囲む幅約10m前後の濠跡の痕跡が部分的に遺存している。

これまで岡氏居館跡遺跡では平成2年に当調査地の東側隣接地で発掘調査が実施されているが、濠跡から離れるせいか、城跡に関連する遺構は検出されず、現在までのところ居城の存在を確実に証明する考古学的資料は認められないのが現状である。

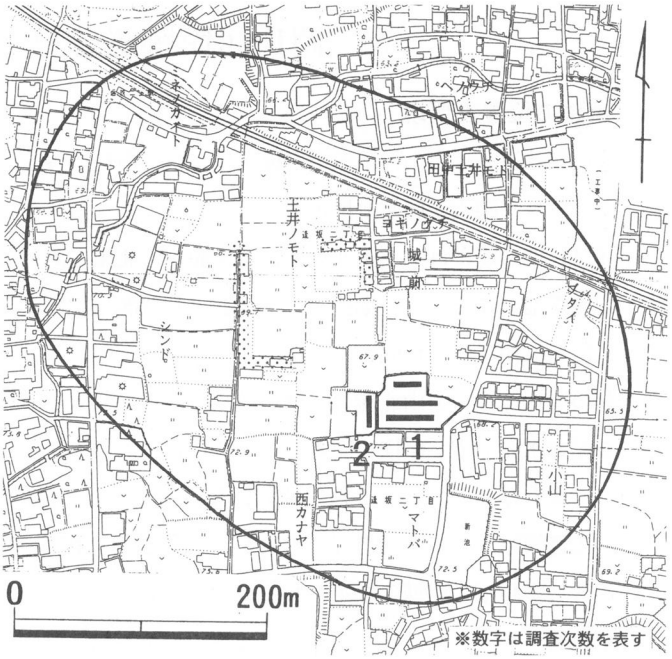


図11　岡氏居館跡遺跡調査地位置図（S＝1／6,000）

当調査地は、現況でも居館の東側の濠跡の痕跡が明瞭に残る水田から南へ約30mの地点にあたり、特に濠や土塁などの館の外郭施設にかかわる遺構が検出される期待がもたれた地域である。

Ⅱ　調査の概要

（1）調査の契機と経過

今回の発掘調査は、分譲住宅建設に伴う宅地造成工事のため、平成6年7月22日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。香芝市教育委員会では事業対象地域の一部が岡氏居館跡推定地の外濠南側に該当する可能性がもたれたため、事業者側と協議のうえ、外濠の有無確認を主眼とした発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、まず、事業対象地の東西南北4箇所に一辺1mの試掘坑を設定して地下の基本層序を観察した後、地割の痕跡から濠跡や土塁が予想される地域に南北長さ25m、東西幅3mの調査区を設定して試掘調査を実施することとした。

試掘調査の結果、中世～近世の土器片が出土したものの、土塁や濠跡等当初予想されていた城跡に関連する遺構はまったく検出されなかったため、調査区域の拡張は不要と判断し、一連の記録保存の過程を経て発掘調査を終了した。

調査は平成7年1月24日～同年2月1日まで実質7日間に亘って実施し、調査面積は75㎡であった。

（2）基本層序

調査区の基本層序は、以下の通りである。

第1層　暗灰色砂質土層　〔層厚24cm〕（現代耕作土）
第2層　黄褐色砂質土層　〔層厚6cm〕（現代耕作土床土）
第3層　黄褐色粘質土層　〔層厚24cm〕（小礫を普遍的に含有する）
第4層　暗茶灰褐色砂質土層〔層厚20cm〕（マンガン班粒を普遍的に含有する）
第5層　暗茶灰褐色砂質土層〔層厚16cm〕（3層に比してやや粘質）
第6層　黄褐色粘質土層　（基盤層。普遍的に小礫を含有する）

土層観察の結果から、二上山北麓から扇状地末端にかけて緩やかに傾斜する旧地形の緩傾斜面が確認され、周辺一帯は後世（近世か？）の水田造成に伴い、大規模な地形の改変が行われていたことが判明した。

扇状地の上方の調査区中央部から扇状地先端の南側にかけて厚く堆積する4～5層中から、瓦器皿や瓦質土器、羽釜、土師器などの中世中頃から近世初頭にかけての土器片数十点が出土したが、濠跡や土塁等の館を囲繞する遺構等は検出されず、当地は館の外側に相当することが判明した。

Ⅲ　まとめ

地割の痕跡から濠跡や土塁の想定ライン上に設定した試掘坑や調査区域内からは、濠跡や土塁等の居館にかかわる遺構は検出されなかったことから、少なくとも当調査地内には濠跡や土塁等の館を区画する囲繞施設は存在しないことが確実となった。

しかし、当調査地の北側の水田中には、現況でも居館東側の濠跡の痕跡が明瞭に遺存しており、また、当該時期の出土遺物からみても、現在でもその痕跡が遺存する東西の濠跡に囲まれた範囲内に館にかかわる何らかの遺構が存在する可能性は充分考えられる。

文献によると、北葛城郡域においては、中世から近世にかけて岡氏をはじめ万歳氏や片岡氏、高田氏、布施氏らの在地豪族が群雄割拠を繰り返していたことが記述されており、各氏族の勢力基盤地域の要害の地に山城や平城の推定地が遺存する。

現在までのところ、これらの中世～近世の土豪の居城の実態を発掘調査で考古学的に検証した事例はなく、実態は不明であるが、開発危機が目前に迫った現在、今後の発掘調査の進展による城郭遺構の実態解明が急がれる。

（文責　下大迫）

註　記

（1）村田修三ほか編　1980　『日本城郭大系第10巻』「奈良県」　新人物往来社

6　顕宗陵古墳第２次調査

Ⅰ　遺跡の位置と環境

顕宗陵古墳は、現在、宮内庁より第15代顕宗天皇の陵墓として指定されている古墳である。

顕宗陵古墳は、通称「藤山丘陵」もしくは「藤山台」とよばれる標高約58ｍ前後の低丘陵の東側末端部付近に位置しており、当古墳に隣接して西方には直径15～20ｍ前後の小規模な円墳数基から成る古墳時代後期の北今市・藤山古墳群が所在する（現在は大半が消滅）。また、一連の藤山丘陵の丘陵東南部では、古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡が数棟検出されている。[1)]

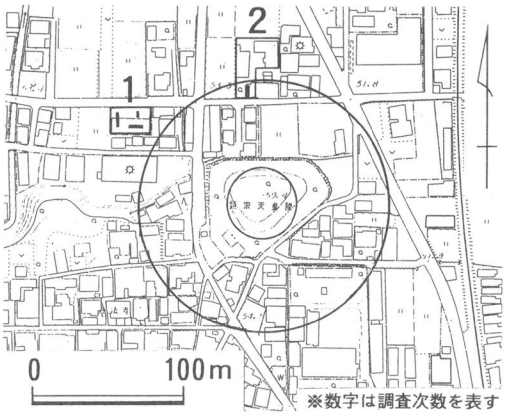


図12　調査地位置図（Ｓ＝１／5,000）

調査地は、古墳状隆起の中心部から北方約70ｍの地点で、地形的には「藤山丘陵」の丘陵域の北東末端部の谷部に位置する。

Ⅱ　調査の概要

調査は分譲住宅建築に伴う宅地造成工事のため平成７年１月12日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。当遺跡の範囲内では、これまで古墳の西側で１度試掘調査が実施されたのみで古墳に関わる顕著な遺構や遺物は検出されていないものの、事業対象地域の南側が古墳の周濠推定域に近接するため、事業者と協議を行い、特に古墳の周濠の有無確認を主眼とした試掘調査を実施することとした。

調査は、古墳に近い開発区域南側に南北長さ10ｍ、東西幅３ｍの試掘坑を設定して地下の基本層序の把握および遺構や遺物の有無確認のための試掘調査から開始した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

第１層　暗灰褐色砂質土層〔層厚22cm〕（工場用地造成に伴う客土）

第２層　暗灰色砂質土層　〔層厚20cm〕（現代耕作土）

第３層　黄褐色砂質土層　〔層厚10cm〕（現代耕作土床土）

第４層　灰褐色砂質土層　〔層厚18cm〕（水田造成に伴う整地土層。古墳時代や奈良時代の土器片、中世の土器片を包含する）

第５層　黄褐色粘質土層　〔層厚10cm〕（層上面に暗青灰色シルトのかすかな凹地あり。中・近世の水田面か？）

第６層　黄褐色粘質土層　（基盤層。部分的に小礫を含む）

第４層の水田造成に伴う整地土層中には古墳時代後期の須恵器高坏（脚部）断片１点や奈良時代の須恵器短頸壺（口頸部）破片１点をはじめ中世の瓦器椀（口縁部）細片１点等が出土したが、周濠等古墳に伴う遺構は検出されず、また、各層中とも遺構は検出されなかったことから全面的な本調査は不要と判断し、記録保存のための図面作成および写真撮影終了後、当日中に埋め戻して試掘調査を終了した。

調査総面積は34㎡、調査期間は平成７年２月17日の１日間であった。

Ⅲ　まとめ

当調査地は古墳よりやや離れるせいか、古墳に伴う周濠の有無については確認することはできなかった。

しかし、当調査でも藤山古墳群や藤山遺跡の存続時期にあたる古墳時代後期の須恵器をはじめ、奈良時代の須恵器の破片数点が出土しており、真上の丘陵上にこれらに関連する何らかの遺跡が存在していたことを傍証している。付近一帯は過去の住宅建築に伴う宅地造成の際にすでに丘陵上の大半の遺構は破壊されているものと思われるが、同丘陵上には、わずかながらも人為的な改変を受けずに残された自然地形や古墳状隆起が部分的に点在しており、今後の開発に際しては喚起を要したい所である。

（文責　下大迫）

註　記

（１）佐藤良二編　1991　『藤山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会

7　遺物散布地第１次調査

Ⅰ　遺跡の位置と環境

下田東遺跡は香芝市の中央部、藤山丘陵の丘陵末端部から大和川の一支流である葛下川沿いに形成された沖積低地付近を中心に所在する古墳時代の遺物散布地である。

遺跡の西約100～200ｍの丘陵上には小規模な円墳数基からなる古墳時代後期の北今市・藤山古墳群（現在大半が消滅）をはじめ、平成２年の第１次調査で古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物群が確認された藤山遺跡等が所在する[1)]。また、当遺跡に接する葛下川の下流、東方から南東方向約700ｍ圏内の水田中には縄文時代から古墳時代、中世にいたる土器や石器の遺物散布地が広がっているが、ともに正式な発掘調査は実施されていないため、当遺跡も含めて実態の不明な遺跡が多いのが現状である。

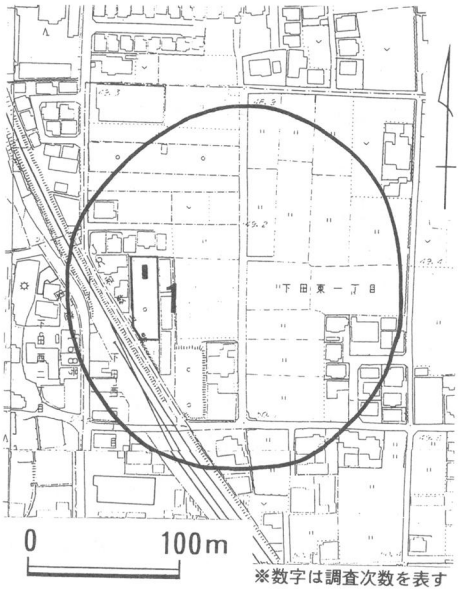


図13　調査地位置図（Ｓ＝１／5,000）

Ⅱ　調査の概要

共同住宅建設に伴い、事業対象地域中央部に南北長さ10ｍ、東西幅２ｍの調査区を設定して地下の基本層序の把握および遺構や遺物の有無確認のための試掘調査を実施した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

第１層　暗灰色砂質土層　〔20㎝〕（現代耕作土）
第２層　明灰褐色砂質土層　〔18㎝〕（現代耕作土床土）
第３層　灰褐色砂質土層　〔38㎝〕（やや粘質。マンガン班粒含有。近世の整地土層か？）
第４層　明灰褐色粘質土層　〔24㎝〕（一部グライ化。）
第５層　灰褐色粘質土層　（基盤層。小礫を含有する）

第３層中に時期不明の土師器や羽釜（口縁部）等の中・近世の土器片数点が出土した以外は各層中とも遺構は確認されなかったことから本格的な発掘調査は不要と判断し、記録保存のための図面作成および写真撮影終了後、当日中に埋め戻して試掘調査を終了した。

調査総面積は28㎡、調査期間は平成７年２月13日の１日間であった。　（文責　下大迫）

註　記

（１）佐藤良二編　1991　『藤山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会

8　鎌田遺跡第８次調査

Ⅰ　遺跡の位置と環境

鎌田遺跡は奈良県香芝市の南端、鎌田小学校の周辺に位置する縄文時代から古墳時代にわたる複合遺跡である。

遺跡は、二上山麓東部から北東方向に向かって緩やかに派生する二上山扇状地の末端部を中心に展開しており、遺跡の北東約１㎞には古墳時代後期の大型前方後円墳である狐井城山古墳（全長約140ｍ）や縄文時代前期～中期の石器生産遺跡と推定される狐井遺跡が、また、南西約1.5㎞の地点には大和でも縄文～弥生時代の有数の拠点集落である竹内遺跡（北葛城郡当麻町）が所在する。

鎌田遺跡では、これまで小規模な立会・試掘調査も含めて合計７次の発掘調査が行われており、各調査区で大小の自然流路や河道に伴う砂層から古墳時代前期～中期の土器や木製農耕具類をはじめ、縄文時代（晩期）～弥生時代（中期）の土器が少量出土している。

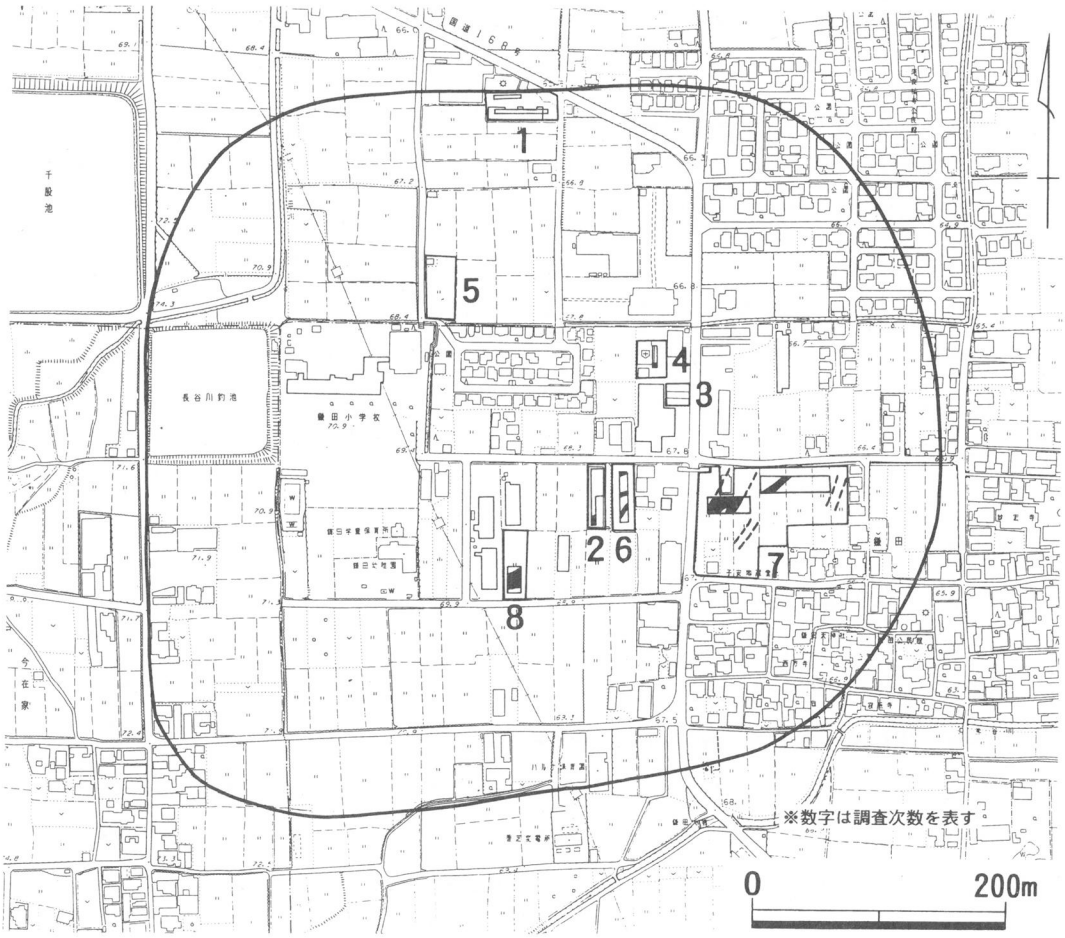


図14　鎌田遺跡調査地位置図（Ｓ＝１／6,000）

なかでも、平成４年度の第６次調査では古墳時代前期～中期の大量の土器類とともに大型掘立柱建物の建築部材や護岸遺構など[1)]が、また、平成５年度の第７次調査では南西から北東方向に流れる幅17ｍ、深さ検出面より約3.6ｍの大規模な河道跡が検出されており[2)]、徐々に当遺跡の地理的古環境等を含めた遺跡の一端が明らかになりつつある。

今回の調査地は古墳時代の大型掘立柱建物の建築部材の出土で全国的に話題を呼んだ第６次調査地の南西約100ｍの地点で、これらに関連する遺構や遺物が検出される期待がもたれた地域である。

Ⅱ　調査の概要

（１）調査の契機と経過

調査は、地上３階建マンション建設のため、平成６年10月31日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。香芝市教育委員会では、事業対象地域が古墳時代の建築部材が出土した平成４年度の第６次調査地に近接しており、また、マンション建設に伴う建物基礎や浄化槽埋設工事に伴う地下遺構への影響が危惧されたため、事業者側と協議のうえ、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、開発予定地域東側に東西幅1.5ｍ、南北長さ20ｍの南北方向の試掘調査区を設定して地下の基本層序の把握および遺物包含層の有無確認のための試掘調査から実施した。

試掘調査の結果、事業対象地の中央部から南側付近にかけて試掘調査区を西方から東方に流れる河道に伴う砂層を検出したため、改めて事業対象地域の中央部に東西幅４ｍ×南北長さ25ｍの調査区を設定して河道の検出を主眼とした本格的な発掘調査を実施することとした。

現地調査は、平成７年３月15日から同年３月26日まで、試掘調査期間から本調査期間を含めて実質８日間に亘って実施し、調査総面積は130㎡であった。

（２）層序（図15）

調査区の基本層序は以下の通りである。

第１層　暗灰色砂質土層〔層厚25㎝〕（現代耕作土）

第２層　黄褐色砂質土層〔層厚６㎝〕（現代耕作土床土）

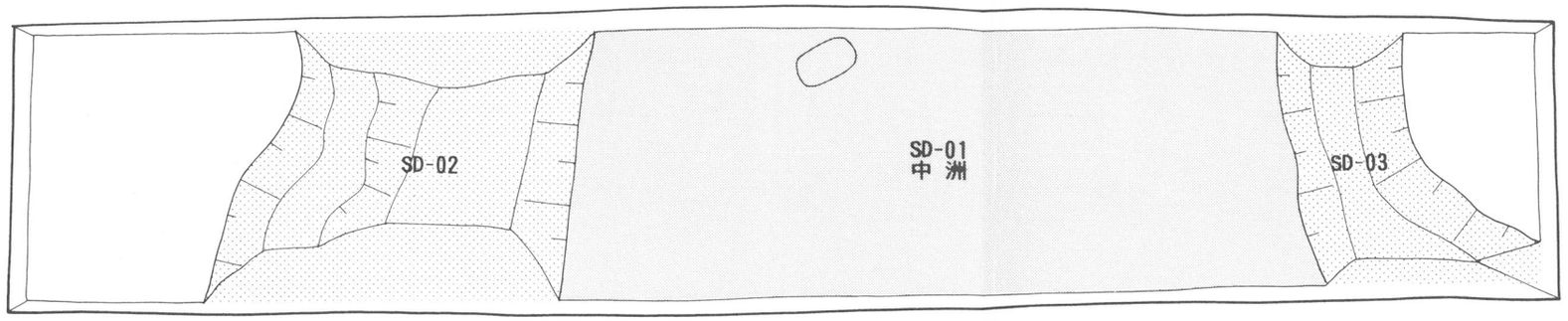
第３層　灰褐色砂質土層〔層厚15㎝〕（弱粘砂層。中・近世遺物包含層）

第４層　黄褐色砂質土層〔層厚６㎝〕（中世？素掘溝。第５層上面各所に薄く介在する）

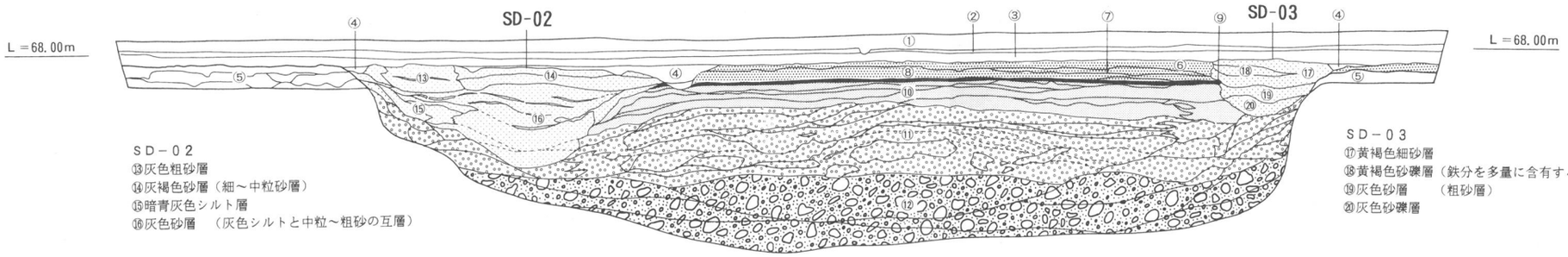
第５層　黒褐色砂質土層〔層厚35㎝〕（やや粘質）

鎌田遺跡では、これまで行われた数次の調査結果より、付近一帯には河道跡に伴うおびただしい洪水砂層が介在することが確認されている。当調査地においても例外ではなく、層中の各所に洪水の痕跡と思われる砂層が介在しており、軟弱な地質的様相を呈している。

このうち、遺物を包含するのは中世～近世土器を含む第３層の灰褐色砂質土層と縄文時代晩期～古墳時代前期の土器を包含する第５層の黒褐色砂質土層である。



SD-01中洲・SD-02・SD-03平面図



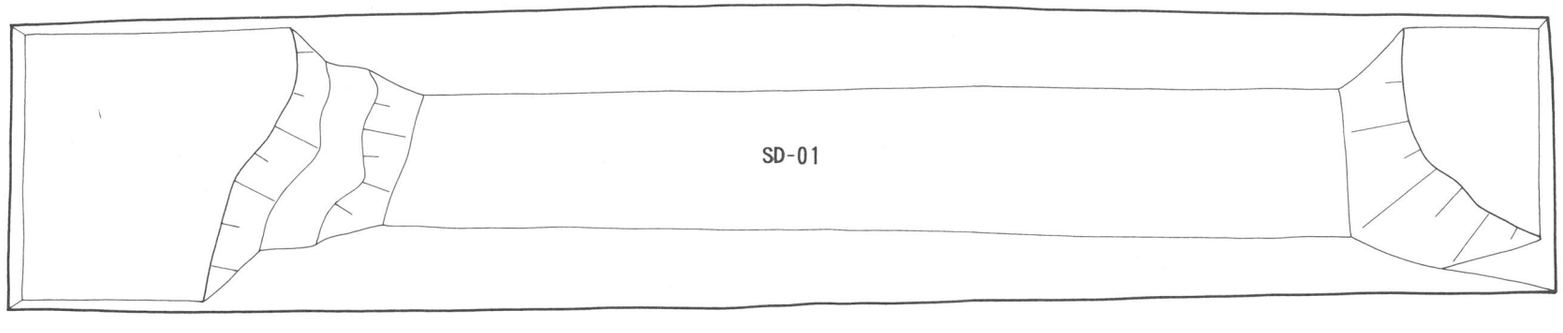
ＳＤ－０２
⑬灰色粗砂層
⑭灰褐色砂層（細～中粒砂層）
⑮暗青灰色シルト層
⑯灰色砂層　（灰色シルトと中粒～粗砂の互層）

ＳＤ－０３
⑰黄褐色細砂層
⑱黄褐色砂礫層（鉄分を多量に含有する）
⑲灰色砂層　　（粗砂層）
⑳灰色砂礫層

①暗灰色砂質土層（現代耕作土）
②黄褐色砂質土層（現代耕作土の床土）
③灰褐色砂質土層（弱粘砂層）
④黄褐色砂質土層（中世？素掘溝）
⑤黒褐色砂質土層（やや粘質。付近一帯の河道検出層）

ＳＤ－０１
⑥灰褐色シルト層
⑦灰色砂層　　（細砂）
⑧明灰色シルト層　（部分的に細砂混入）　　最上層
⑨暗青灰色砂質土層（やや粘質。炭化物・炭粒を含有する。布留２式期の土器包含層）
⑩暗青灰色砂層　（シルトと細砂の互層。部分的に腐食土層塊含む）　　上層
⑪灰色砂層　　（灰色中粒～粗砂の互層。部分的に暗色系のシルト層塊混入）　　中層
⑫灰色砂礫層　　（灰色中粒～粗砂・礫の互層）　　下層

SD-01・SD-02・SD-03土層図



SD-01平面図

0　4m

図15　鎌田遺跡第８次調査遺構平面図・土層断面図（Ｓ＝１／100）

Ⅲ　検出遺構

数次の調査結果から、当調査地でもこれらの河道跡の存在が予想されていたが、予想通り、第5層の黒褐色砂質土層上面で東西方向に流れる古墳時代の大規模な河道跡1条と河道の中洲を、そして、中洲を挟んで北岸と南岸で中・小規模の流路跡2条を検出した。

以下、検出遺構の概要について簡略に記す。

【SD－01】（図15）

南北幅15.7mの東西方向に流れる河道跡で、最深部では遺構検出面の第5層（図15－⑤）上面から約2.4m（表土から約3.0m）を測る。

堆積土は、全体的に各所に細粒～粗粒の砂層やシルト層が入り乱れて互層を成しており、一様ではないが、おおむね、静穏堆積を示す淡い灰褐色系統の細砂層やシルト層で形成される最上層と、暗青灰色系統のシルト層や細砂層の互層で形成される上層、部分的に暗灰色系統の粘質土塊やシルト層を介在した灰色系統の中粒～粗粒の砂層の互層で形成される中層、灰色系統の中粒～粗粒の砂層や礫層で形成される下層の大別して4層に識別、分離される。

河道の堆積作用によって南北幅約8mにわたって安定した平坦な中洲（図15－⑨・⑩）が形成されており、特に中洲の北岸付近からは古墳時代前期（布留2式期）の土器が一括して出土した。

中洲が形成される以前の河道の中層～下層には遺物は少なく、古墳時代前期（庄内式期）や弥生時代（前期）の土器片数点が出土したのみであった。

河道の埋没層である最上層から出土した小形丸底壺から河道の廃絶年代は布留3～4式期と考えられる。

【SD－02】（図15－⑬～⑯）

SD－01の南岸を北東方向に流れる検出幅4.5m、深さ約1.5mの河道跡。SD－01の河川の沖積作用によって中央部に中洲が形成された後、南岸を流れる。

堆積土は淡い灰褐色系統の細粒～中粒の砂層で形成される上層と暗灰色系統の中粒～粗粒の砂層の互層で形成される下層の大別して2層に識別・分離される。

堆積土中からは、古墳時代前期（布留2～3式期）の少量の土器片のほか、桃核や栗、樫の実などの植物遺体も出土している。

【SD－03】（図15－⑰～⑳）

SD－01の北岸を北東方向に流れる幅2m、深さ約1mの小規模な流路跡。SD－01の河川の沖積作用によって中央部に中洲が形成された後、北岸を流れる。

堆積土は、中粒～粗粒の砂層と小礫を含有する砂礫層の互層から成り、最上層は鉄分を多量に含有する黄褐色系統の細砂層で埋積される。

堆積土中からは、古墳時代前期（布留2～4式期）の土器片数点が出土した。

Ⅳ　出土遺物

SD－02・03とも遺物は希少であったが、なかでもSD－01上層の中洲上面からは通常法量コンテナ約15箱分の古墳時代前期の古式土師器が一括出土している。本稿では、包含層出土土器とSD－01出土土器のうち図示可能な遺物のみ掲載することとする。

なお、計測値等の個々の土器の詳細については巻末の出土土器観察表（P30～32）に明記した。

（1）包含層出土土器（図16、図版９－１）

包含層出土遺物の大半は中世土器の細片であるが、特筆すべき遺物として縄文土器がある。

１は深鉢型土器である。口縁部は、わずかに外反し、端部は丸くやや端面をもつ。胴部の張りは弱く、胴部の最大径は口径とほぼ同じである。胴部外面や口縁部内面には横位の粗い条痕調整が施される。

２は底部である。底径は約６㎝でくぼみ底を呈し、底部上位には横位の粗い条痕がみられる。

土器の胎土や色調から１の深鉢型土器の底部と考えられ、形態的特徴から縄文時代晩期中葉の滋賀里Ⅲｂ式期に相当すると考えられる。[3)]

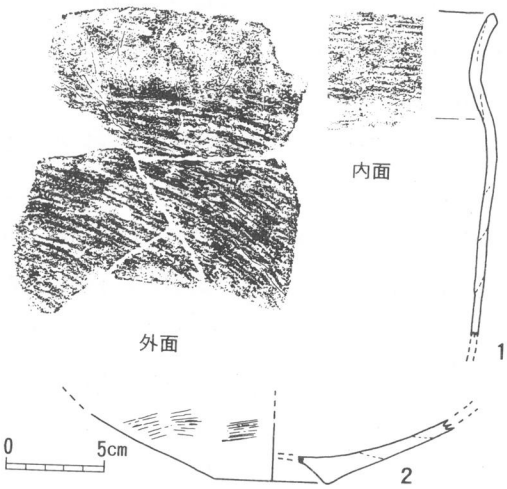


図16　縄文土器実測図（Ｓ＝１／４）

（2）SD－01最上層（図15－⑥・⑧）出土土器（図17、図版９－２・３）

１はSD－01の上層（第９層）出土土器群より２層上面の第６層から、２は同じく上層（第９層）出土土器群より１層上面の第８層から出土しており、後述する上層出土土器群とは層位的に分離されるのでSD－01の廃絶時期を示す最上層出土土器として取り扱うこととする。

１は小形丸底壺である。口縁部径が体部最大径とほぼ等しく、口縁部と体部の接合部は明瞭な稜線を持たない。口縁部内外面とも横ナデ、体部～底部内外面ともハケによる調整を施す。

２は布留式甕である。口縁部は内湾し、端部は丸く仕上げている。体部～底部外面は縦位のハケ、肩部は粗い横位のハケが施され、ハケ調整の作業終始痕を明瞭に残す。

体部内面はヘラケズリ、底部内面には成形時の多数の棒状圧痕を明瞭に残す。

１については単独出土遺物であるため断定はできないが、土器の形態的特徴から布留３～４式の帰属時期が考えられる。

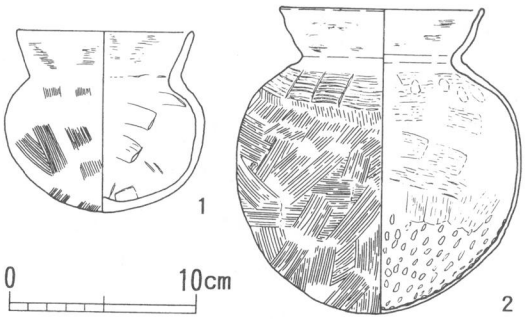


図17　SD－01最上層出土土器実測図（Ｓ＝１／４）

（3）SD－01上層（図15－⑨）出土土器（図18～20、図版9・10－4～24）

SD－01の上層（第9層）出土土器の内訳は、破片も含めた識別可能な個体別では、甕20点、壺4点、高坏4点、器台2点、小型丸底鉢6点、小型丸底壺7点となっており、なかでも甕の占める割合が最も多い。これらの土器は、中洲の北岸を中心とした地点から集中して出土しており、河道跡出土資料の中でも一括性の高い土器群であると言える。

1～3は小形丸底壺である。球形の体部を有し、体部高が口縁部高を凌駕する1と偏球形の体部に体部高をしのぐ口縁部高を有し、口縁部はわずかに内湾しながら直線的に立ち上がる2・3がある。1は口縁部内外面ともミガキ、体部から底部外面はハケが施される。2は口縁部内外面・体部外面は丁寧な横位のミガキ、体部内面にはハケ調整が施される。3は器表面の摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが口縁部内外面に横ナデの痕跡を残す。

4～6は小形有段口縁の鉢である。皿状の体部と屈曲する口縁部を有する。4・5の口縁部内外面は横位のヘラミガキ、体部内面は横位のヘラミガキの後、縦位の放射状ミガキが施される。

7・8は高坏である。ともに器壁が薄く仕上げられた精製品であり、直線的に外方へのびる口縁部を持つ。坏部内外面とも丁寧な横位のヘラミガキが施されている。脚部はいずれも中空であり、板状工具による縦位のナデ後、横位のナデが施される。8の脚部内面にはヘラケズリが施される。

9は器台である。中空の精製品であり、受部と脚部は、ほぼ直線的に外方へ開く。外面は全体的に丁寧な横位のミガキが施され、脚部内面には部分的にヘラケズリが施される。

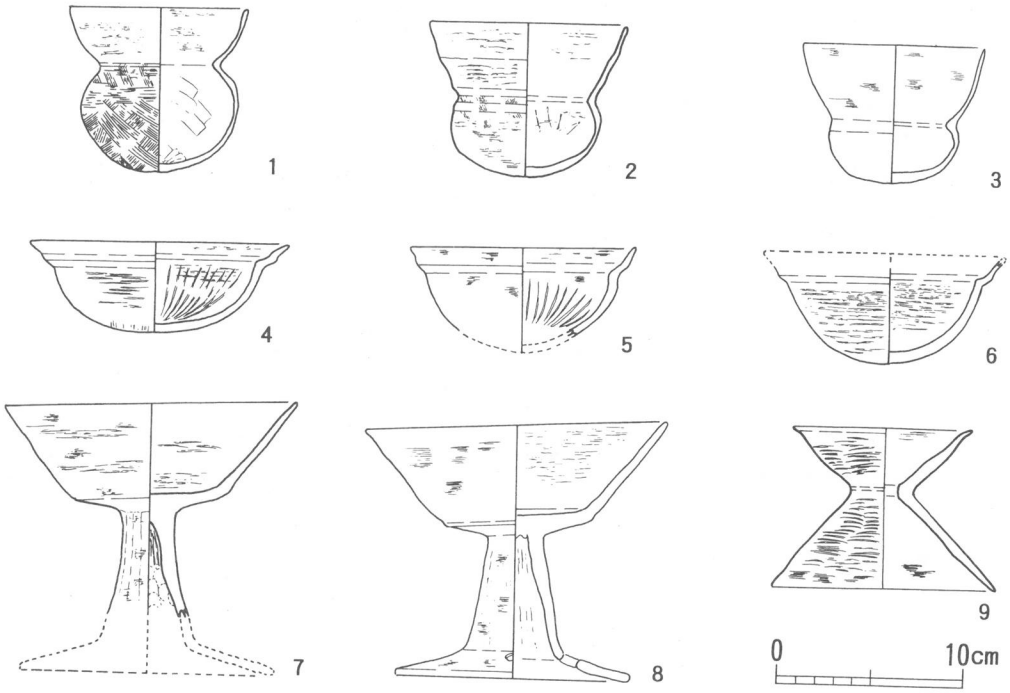


図18　SD－01上層出土土器実測図（1）（S＝1／4）

10〜18は、いわゆる布留式甕である。ほとんどの甕の口縁部は内湾し、端部を内側に肥厚させる形態であるが、端部を内側に肥厚しない18がある。調整方法は、おおむね、体部内面はヘラケズリ、体部外面にはハケ調整が施される。なお、10・17・18の底部内面には成形時の棒状圧痕を残す。

布留式甕以外の甕として19・20がある。いずれも体部外面は成形時の指頭圧痕やタタキ目を残し、調整も粗雑である。特に20の甕の胎土中には他の土器に比して砂粒を多く含有する。

21は小形の二重口縁壺の口縁部である。広口壺口縁と二重口縁との接合部線（段）が内外面ともさほど明瞭ではなく、口縁部が緩やかに外傾する。

22は壺の口縁部から体部上位である。口縁部は内湾しながら外傾し、口縁端部は水平な面を作る。体部外面はハケの後ナデ調整を施し、内面はヘラケズリが施される。

これらの土器は、土器の形態的特徴等から布留２式を中心とした時期に比定される。

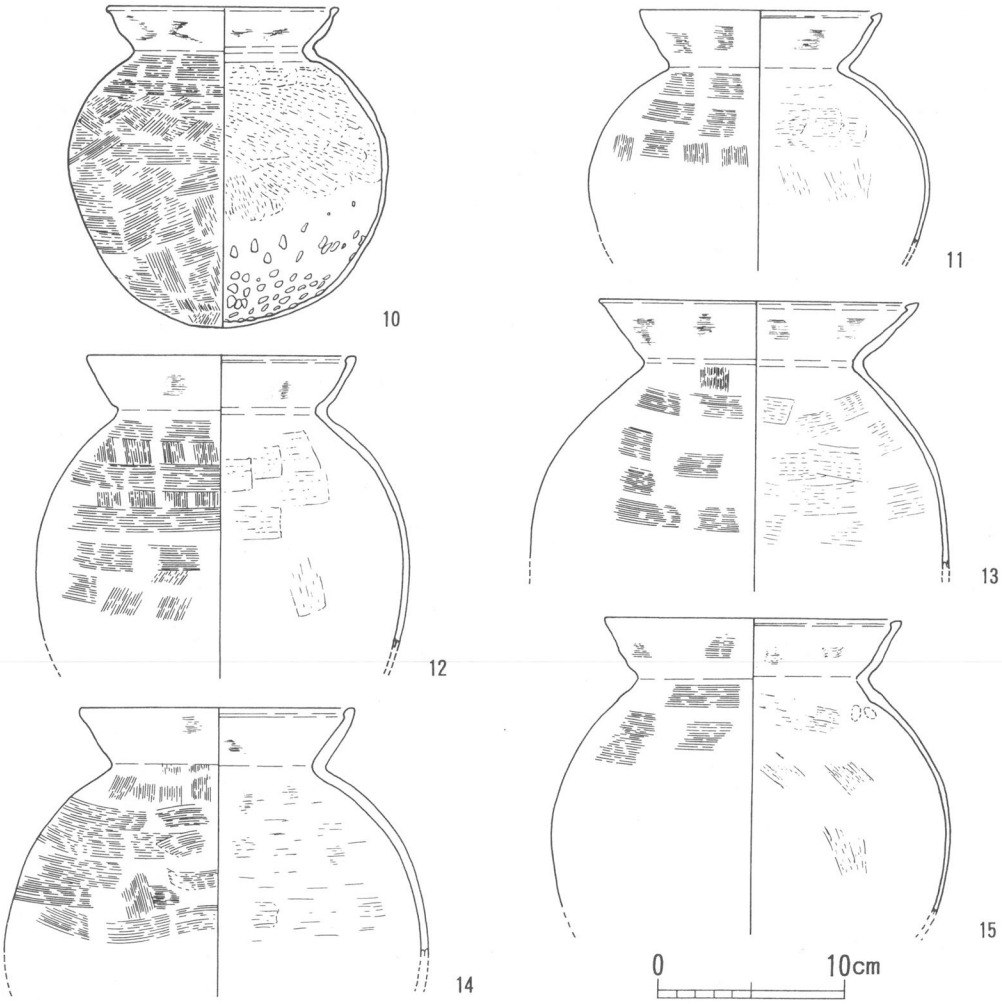


図19　SD－01上層出土土器実測図（２）（S＝１／４）

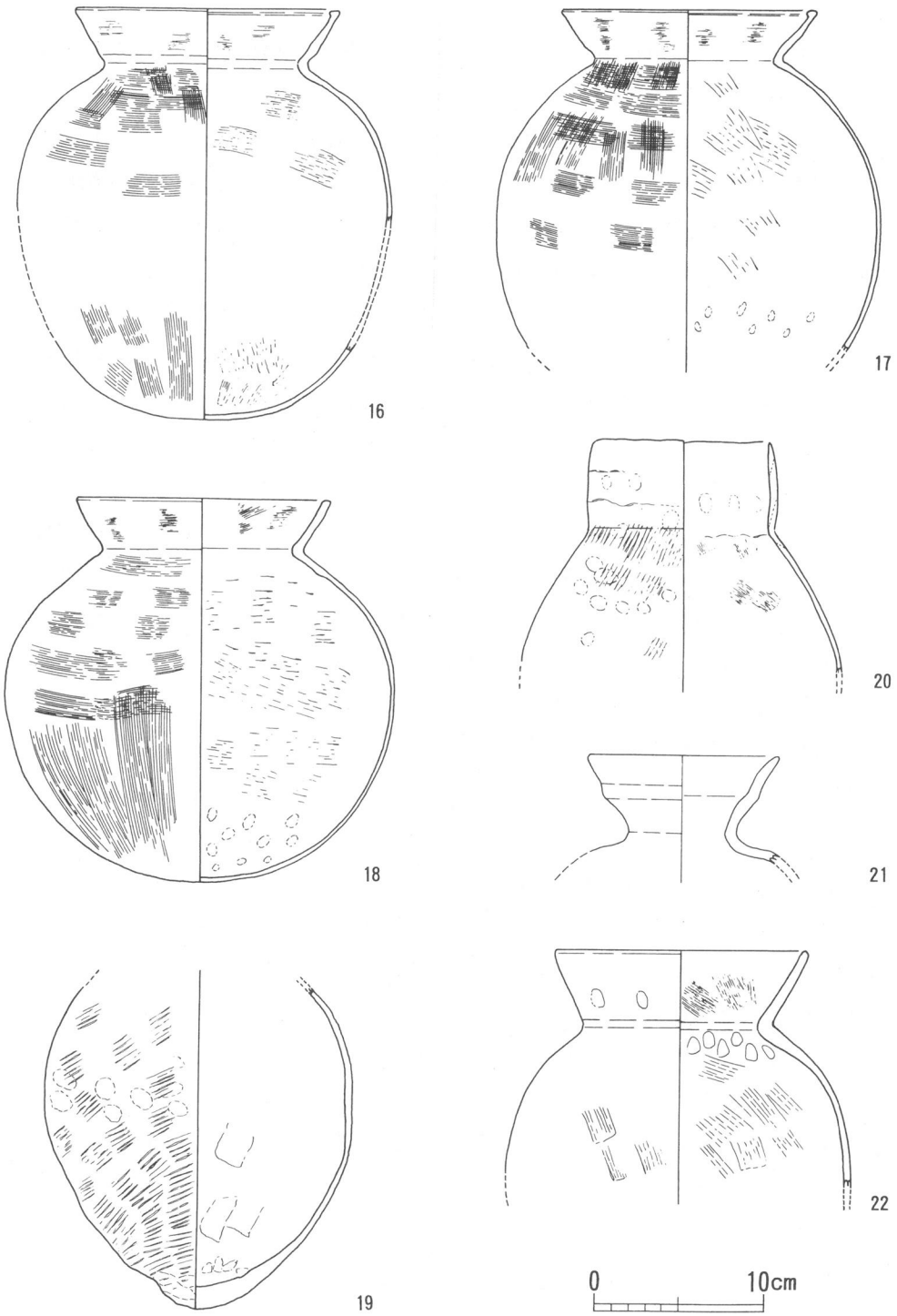


図20　SD－01上層出土土器実測図（3）（S＝1／4）

V　まとめ

発掘調査の結果、第７次調査に続いて古墳時代前期の大規模な河道跡１条と河川の堆積作用によって形成された中洲を検出した。

中洲上面からは、甕などの煮沸用具を中心とした古墳時代前期の土器が一括して出土しており、中洲上で一時期安定した生活面があったことが確認された。しかも、今回検出した河道跡は、平成５年度の第７次調査で検出した河道のほぼ延長線上にのびており、また、河道の規模や堆積土の土質が酷似していることから、両者は同一の河道である可能性が強い。

これまで鎌田遺跡では、各調査地で幅５ｍ前後、深さ２ｍ前後の弥生時代前期～古墳時代中期の小規模な自然流路跡が数条検出されているが、第７次調査と第８次調査で検出された幅15～20ｍ、深さ３～４ｍ級の河道はこれまで検出した河道跡の中でも最大規模のものであり、二上山麓東部の当麻地域から扇状地形に沿って香芝市内に注ぐ、当地域を流れていた現在の熊谷川のような旧河道の本流と考えられる。

当調査やこれまでの調査知見を総合すると、鎌田遺跡は二上山麓東部の当麻地域から北東方向に向かって緩やかに派生する扇状地末端部から沖積低地上に位置しており、扇状地形の谷間に沿って河道の本流や本流から分岐・分流した中～小規模な自然流路が千鳥足状に乱流していたようであり、過去の地理的環境を物語るかのように当遺跡の周辺では、何層・何時期にもわたって河道からあふれ出した洪水砂層や暗青灰色系統の粘質土層を中心とした氾濫源特有の常に水の滞水した地質的様相を示す低湿で軟弱な土壌地帯が一面に広がっている。

なかでも、時期的には、特に、縄文時代～弥生時代にかけては扇状地末端地域特有の河川の沖積作用が進行途上にあったものと思われ、沖積作用が進行して行く過程の中で縄文時代～弥生時代の遺構面は徐々に地下深くに埋積・埋没されて行き、当地域で比較的安定した地盤が形成されるのは土器の包含量をみても出土総数が増加する古墳時代前期以降のことと考えられる。

従って、特に河川の沖積作用が進行途上にあった縄文時代晩期～弥生時代中頃（現在までのところ弥生時代後期の土器は出土していない）には安定した集落が立地する環境としては不安定な要素が多々あり、集落が立地する良好な地理的環境は現在の香芝市域には期待されず、より高所に位置する西方の当麻町域に居住域の中心があるものと推定されるが、第６次調査や第８次調査の調査成果で古墳時代の生活の痕跡が確認されたことによって、古墳時代の居住域は第６次調査地及び第８次調査地より以西～南西方向付近の微高地上に存在する可能性が強くなった（集落の中心が香芝市域内に収まるか否かは微妙である）。

さて、第８次調査地の北西約200ｍの地点で実施された第５次調査では、古墳時代中期の流路跡から古墳時代の農耕具の一種である「ナスビ形木製品」が、また、第８次調査地の北東約100ｍの地点で実施された第６次調査地では流路跡から「えぶり」などの木製農耕具をはじめ、河川灌漑を

目的とした古墳時代前期の井堰や護岸遺構が検出されている。[4)]

断片的ながらもこれらの調査成果から、香芝市域を中心とした、現在、周知の遺跡範囲として認識されている鎌田遺跡の付近一帯では、二上山麓東部の当麻地域を源流とする河道から分岐・分流した小～中規模な自然流路を一部人工的に改変した河川潅漑による農耕生産が行われていた可能性が強く、当遺跡の性格としては、居住域とするよりはむしろ、水田耕作に関わる農耕生産地域としての傾向が強いと思われる。

特に、縄文時代晩期～弥生時代にかけて、そして、古墳時代においてもこの地下水位が高く、湧水が豊富で河川潅漑の容易な扇状地末端地域の低湿な土壌地域を利用した水田経営が営まれていた可能性が強く、近い将来、鎌田遺跡の範囲内やその周辺地域でこの上流からの洪水砂層によって一気に埋没した水田関連遺構が検出される可能性も充分期待される。

遺跡の正確な範囲や中心地等まだまだ不明なところが多いのが現状であるが、今後の綿密な発掘調査を通じて鎌田遺跡の実態解明に努力したい。鎌田遺跡の調査はまだ緒についたばかりである。

（文責　下大迫）

註　記

（1）山下隆次　1993　「4．鎌田遺跡」『平成4年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会

奥田昇編　1994　『第5回特別展　再現・葛城の豪族居館を推理する』香芝市二上山博物館

（2）下大迫幹洋編　1994　『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会

（3）香芝市内出土の同種の縄文時代晩期の資料として瓦口森田遺跡第1次調査出土縄文土器（深鉢型土器）がある。同資料は口縁部内面にも横位の粗い条痕調整が施されており、調整手法的に鎌田遺跡第8次調査出土深鉢型土器と共通する要素が認められる。

また、奈良県内出土の同種の資料としては越部ハサマ遺跡出土縄文土器（深鉢型土器）がある。

佐藤良二・青木勘時　1989　『瓦口森田遺跡』香芝町教育委員会編

近江俊秀　1995　『越部ハサマ遺跡』－大淀町文化財調査報告第1冊－大淀町教育委員会・橿原考古学研究所編

（4）前掲文献1

表２　鎌田遺跡第８次調査出土土器観察表

図番号	器　種	出土地	法量〔cm〕	調　整　法	胎土・色調・焼成	備　考
図　16－１ 図版９－１	縄文土器 深鉢形土器 （口縁部）	包含層	口径　(31.2)	口縁部内面は横位の条痕を施し、外面は横ナデ。胴部外面は条痕調整。胴部内面はナデ調整。	胎土　砂粒を含む、雲母多く含む 色調　にぶい赤褐色　2.5YR 5/4 焼成　良好	口縁部のみ1/8残存
図　16－２	縄文土器 深鉢形土器 （底部）	包含層	底径　(6.0)	底部上位に条痕跡の痕跡を止める。	胎土　粗粒の砂粒を含む、雲母含 色調　にぶい橙色　5YR 7/3 焼成　良好	底部のみ1/2残存
図　17－１ 図版９－２	古式土師器 小型丸底壷	SD－01 最上層	口径　9.3 器高　9.6 体部径　10.6	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は全体にハケ調整。内面はハケ調整。	胎土　長石、雲母、赤斑粒 色調　にぶい橙色　2.5YR 6/4 焼成　良好	完形 底部内面に炭化物付着
図　17－２ 図版９－３	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 最上層	口径　11.0 器高　16.0 体部径　14.8	口縁部は内外面とも横ナデ、肩部外面は横位のハケ、体部・底部外面は縦位のハケ調整。 体部内面はヘラケズリ、底部内面には多数の棒状圧痕あり。	胎土　石英　長石、雲母、赤斑粒 色調　にぶい橙色　5YR 6/4 焼成　良好	完形 体部から底部にかけて煤が付着。
図　18－１ 図版９－４	古式土師器 小型丸底壷	SD－01 中層	口径　9.5 器高　8.7 体部径　8.4 体部高　5.7	口縁部は内外面ともミガキ調整。 体部・底部内面はハケ調整。体部・底部外面全体的にハケ調整。	胎土　精良 色調　にぶい橙色　5YR 7/3 焼成　良好	完形（口縁一部欠損）
図　18－２ 図版９－５	古式土師器 小型丸底壷	SD－01 中層	口径　10.7 器高　8.1 体部径　7.4 体部高　4.3	口縁部内外面・体部外面は丁寧な横位のミガキ調整。体部・底部内面はハケ調整。	胎土　精良 色調　橙色　5YR 6/6 焼成　良好	完形（口縁一部欠損）
図　18－３ 図版９－６	古式土師器 小型丸底壷	SD－01 中層	口径　9.6 器高　7.2 体部径　6.9 体部高　3.2	器表面の剥落が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部内外面にわずかに横位のミガキ調整の痕跡を残す。	胎土　精良 色調　橙色　7.5YR 6/8 焼成　良好	完形（口縁一部欠損） 磨滅が激しい
図　18－４ 図版９－７	古式土師器 小型丸底鉢	SD－01 中層	口径　13.8 器高　4.9 体部高　(3.9)	体部外面は横位のミガキを施し、内面は横位のミガキを施した後、放射状のミガキ調整を施す。	胎土　精良 色調　明赤褐色　2.5YR 5/8 焼成　良好	1/2大

※（　）値は残存値及び復元値を表す。

図番号	器　種	出土地	法量〔cm〕	調　整　法	胎土・色調・焼成	備　考
図 18－5 図版9－8	古式土師器 小型丸底鉢	SD－01 中層	口径　12.0 器高　(5.3) 体部高　(3.9)	体部外面は横位のミガキを施し、内面は横位のミガキを施した後、放射状のミガキ調整を施す。	胎土　精良 色調　にぶい橙色　7.5YR 6/4 焼成　良好	ほぼ完形（口縁部一部欠損）
図 18－6 図版9－9	古式土師器 小型丸底鉢	SD－01 中層	口径　(12.8) 器高　(5.4) 体部高　(4.5)	口縁部内外面とも横ナデ。 体部は内外面とも丁寧な横位のミガキ調整。	胎土　精良、長石、雲母、赤斑粒 色調　にぶい橙色　7.5YR 7/3 焼成　良好	1/2大
図 18－7 図版9－10	古式土師器 高坏	SD－01 中層	口径　15.7 器高　(11.2)	坏部は内外面とも横位のミガキ調整。 脚部は板状工具による縦位のナデ後、横ナデを施す。脚部内面に成形時のシボリ痕跡あり。	胎土　石英　長石、赤斑粒 色調　にぶい橙色　5YR 7/4 焼成　良好	1/2大（裾部欠損） 坏部外面に焼成時の黒班あり
図 18－8 図版9－11	古式土師器 高坏	SD－01 中層	口径　16.0 器高　14.2 裾部径　12.0	坏部は内外面とも、横位のミガキ調整。 脚部外面は板状工具による縦位のナデ後、横ナデを施し、内面には一部ヘラケズリが施される。	胎土　精良、石英　長石、赤斑粒 色調　橙　5YR 7/6 焼成　良好	ほぼ完形（裾部一部欠損）、脚部に4方向の透孔あり
図 18－9 図版9－12	古式土師器 器台	SD－01 中層	口径　9.5 器高　8.5 裾部径　12.0	口縁部内外面ともやや粗めの横位のミガキ調整を施す。裾部外面は横位のミガキ調整。裾部内面は部分的に粗雑なナデ調整。	胎土　精良、長石、雲母、赤斑粒 色調　にぶい橙色　5YR 6/3 焼成　良好	ほぼ完形（口縁・裾部一部欠損）
図 19－10 図版10－13	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　12.1 器高　16.8 体部径　16.9	口縁部、内外面とも横ナデ。 肩部外面は横位のナデ、体部～底部外面にかけて細かいハケを横位・縦位に施す。体部内面ヘラケズリ、底部内面に多数の棒状圧痕あり。	胎土　精良、長石、雲母 色調　にぶい褐色　7.5YR 5/4 焼成　良好	完形（口縁一部欠損）。器表全体に煤付着、底部内面に炭化物付着
図 19－11 図版10－14	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　(13.0) 器高　(18.0) 体部径　(18.1)	口縁部は内外面とも横ナデ、肩部外面は横位のハケ調整。体部内面ヘラケズリ。	胎土　石英　長石、赤斑粒 色調　明黄灰色　7.5YR 7/2 焼成　良好	1/2大 器表全体に煤付着
図 19－12 図版10－15	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　14.3 器高　(15.3) 体部径　19.5	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は縦位のハケ後、横位のハケを施す。体部内面ヘラケズリ、底部内面に棒状圧痕あり。	胎土　石英　長石、赤斑粒 色調　にぶい褐色　7.5YR 7/3 焼成　良好	1/3大
図 19－13 図版10－16	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　17.2 器高　(14.0) 体部径　22.3	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は横位のハケ調整。体部内面ヘラケズリ。	胎土　精良、多量の赤斑粒を含む 色調　にぶい褐色　7.5YR 7/3 焼成　良好	1/2大 器表全体に煤付着

※（　）値は残存値及び復元値を表す。

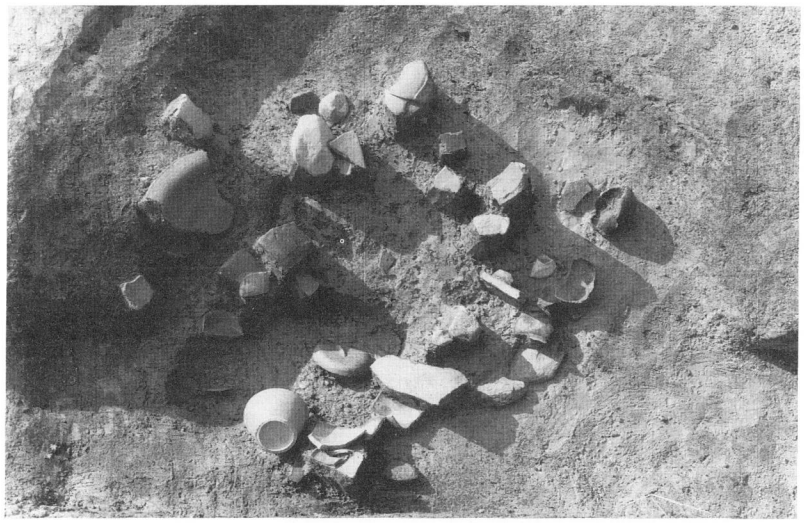
図番号	器　種	出土地	法量〔cm〕	調　整　法	胎土・色調・焼成	備　考
図 19－14 図版10－17	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　14.5 器高　(13.0) 体部径　22.5	口縁部、内外面とも横ナデ。 肩部外面は縦位のハケ後、横位のハケ調整。 体部内面へラケズリ。	胎土　砂粒含む、赤斑粒 色調　にぶい褐色　7.5YR 6/3 焼成　良好	1/2大 体部下位に煤付着
図 19－15 図版10－18	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　15.6 器高　(18.0) 体部径　20.8	口縁部は内外面とも横ナデ。 肩部外面は横位のハケ、体部内面上位はヘラケズリ。	胎土　精良、石英　長石、雲母 色調　にぶい褐色　7.5YR 6/3 焼成　良好	1/4大 器表全体に煤付着
図 20－16 図版10－19	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　15.3 器高　(23.8) 体部径　(21.8)	口縁部は内外面とも横ナデ。 体部外面は縦位のハケ後、横位のハケ調整。体部内面はヘラケズリ、底部内面に棒状圧痕あり。	胎土　石英　長石、雲母 色調　にぶい橙色　5YR 6/4 焼成　良好	1/2大。肩部と体部の境界に米粒大の刺突痕あり
図 20－17 図版10－20	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　15.0 器高　(23.0) 体部径　(22.3)	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は縦位のハケ後、横位のハケ調整。体部内面はヘラケズリ、底部内面に棒状圧痕を残す。	胎土　精良、石英　長石、雲母 色調　にぶい褐色　7.5YR 5/4 焼成　良好	ほぼ完形（口縁部体部・底部ともに一部欠損）
図 20－18 図版10－21	古式土師器 甕 （布留式）	SD－01 中層	口径　14.8 器高　(22.2)	体部外面上位は横位のハケ、体部外面中～下位は縦位のハケ調整。体部内面はヘラケズリ、底部内面には棒状圧痕を残す。	胎土　精良、長石多い、雲母 色調　にぶい褐色　7.5YR 5/3 焼成　良好	ほぼ完形（体部一部欠損） 器表全体に煤付着
図 20－19 図版10－22	古式土師器 甕	SD－01 中層	器高　(19.0) 体部径　(18.0)	体部～底部外面は成形時のタタキ目を残す。 体部～底部内面はハケ、底部内面に成形時の指頭圧痕・棒状圧痕を残す。	胎土　精良 色調　橙色　5YR 5/6 焼成　やや軟質	体部～底部のみ1/3残存（口縁部は全て欠損）
図 20－20	古式土師器 甕	SD－01 中層	口径　(10.3) 器高　(13.2)	口縁部内外面とも軽いナデ（ほとんど未調整）。体部外面は、ほとんど未調整で成形時のタタキ目や指頭圧痕を残す。体部内面は外面に比べてやや丁寧なハケ及びナデが施される。	胎土　粗粒の砂粒を含む 色調　にぶい橙色　5YR 6/4 焼成　良好	口縁部～体部上位のみ1/4残存
図 20－21 図版10－23	古式土師器 二重口縁壷 （口縁部）	SD－01 中層	口径　(11.2)	口縁部内外面ともナデ調整。	胎土　粗粒の砂粒を含む 色調　にぶい橙色　5YR 7/4 焼成　良好	口縁部のみ1/3残存
図 20－22 図版10－24	古式土師器 壷 （口縁部）	SD－01 中層	口径　14.8 器高　(15.0)	口縁部内外面とも横ナデ。 体部外面はハケ及びナデ調整、体部内面はヘラケズリ。	胎土　精良 色調　明黄灰色　7.5YR 7/2 焼成　良好	1/2大（口縁部～体部上位のみ） 搬入土器か？

※（　）値は残存値及び復元値を表す。

図　　版

図版1　尼寺廃寺跡第6次調査

調査地全景
（南から）



ＳＥ－01
上層遺物
出土状況
（東から）

ＳＥ－01
完掘状況
（北から）

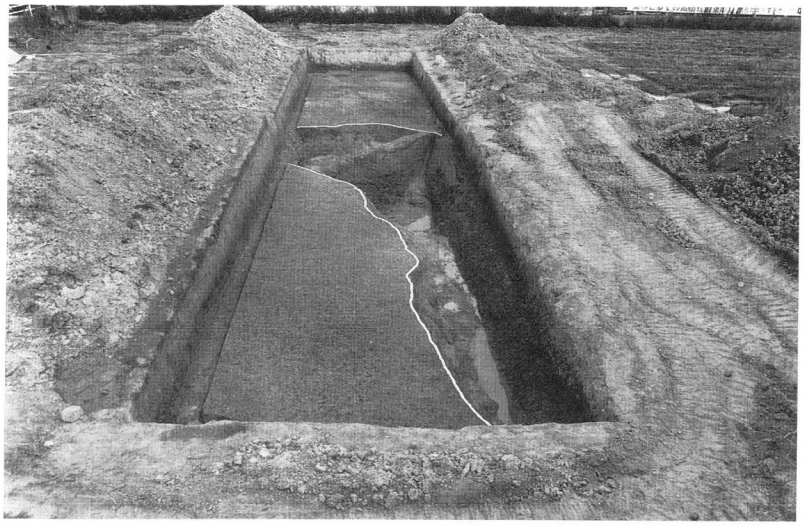
図版2　藤ノ木遺跡第12・13・14次調査

藤ノ木丁遺跡
第12次調査
Aトレンチ全景
完掘状況
（東から）

藤ノ木丁遺跡
第13次調査
Aトレンチ全景
完掘状況
（北から）

藤ノ木丁遺跡
第14次調査
調査区全景
（北から）

図版3　藤ノ木丁遺跡第15次調査

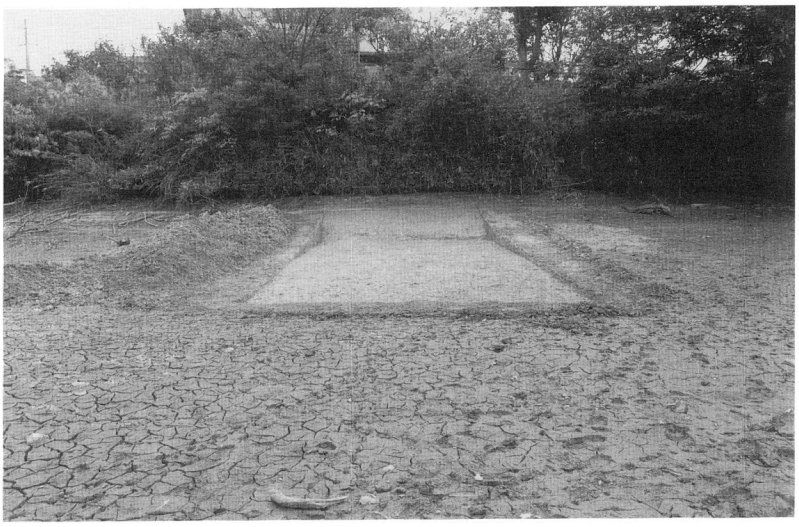


調査区全景
（西から）

調査地遠景
（西から）

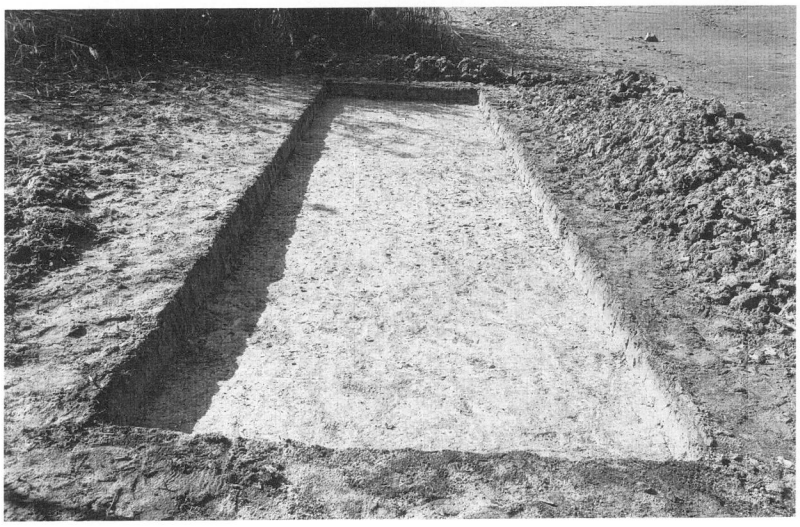
ＳＤ－01
土層堆積状況
（北西から）

図版4　藤山遺跡第4次調査



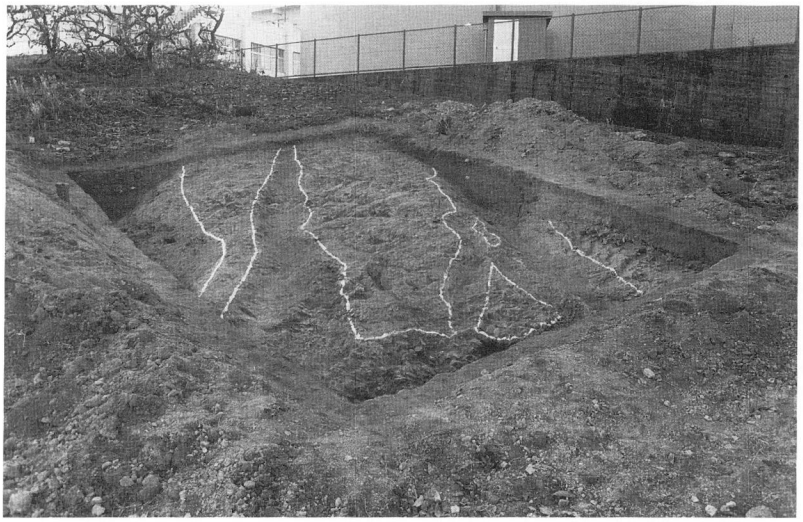
Aトレンチ全景
（西から）

Dトレンチ全景
（北東から）



Gトレンチ全景
（北から）

第1調査区
調査地遠景
（北西から）



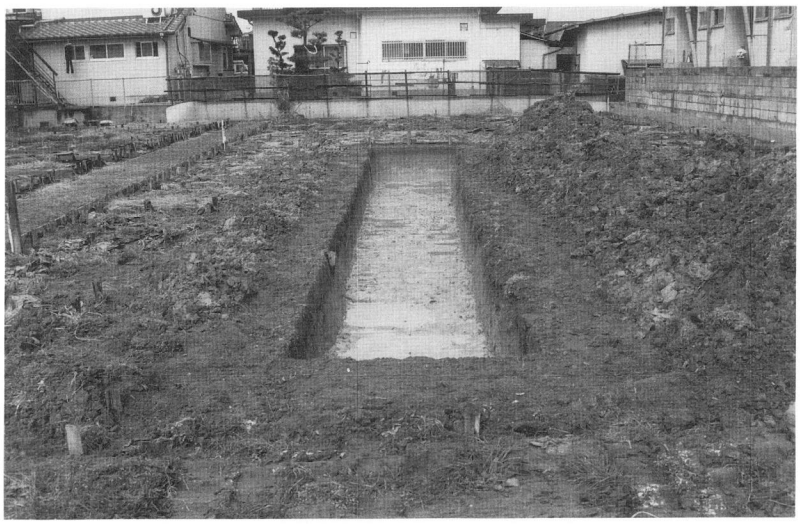
第1調査区
完掘状況
（南から）

第2調査区
完掘状況
（東から）

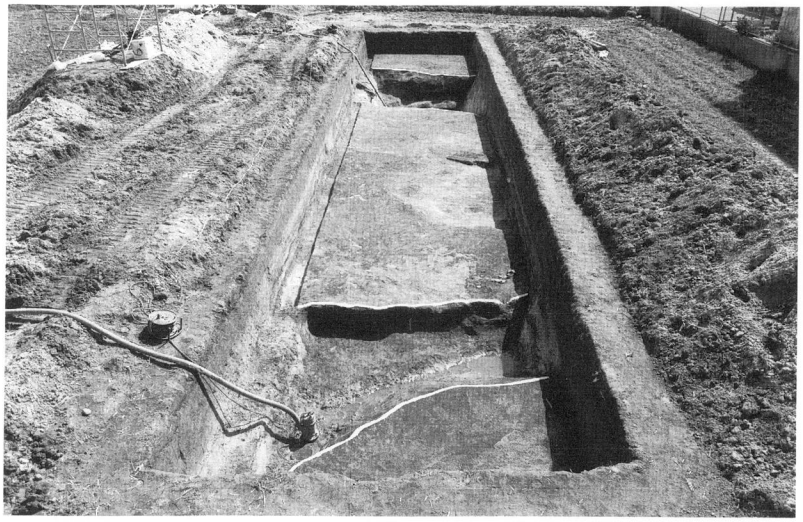
図版6　岡氏居館跡遺跡第2次調査・顕宗陵古墳第2次調査・遺物散布地第1次調査

岡氏居館跡遺跡
第2次調査
調査区全景
（南から）

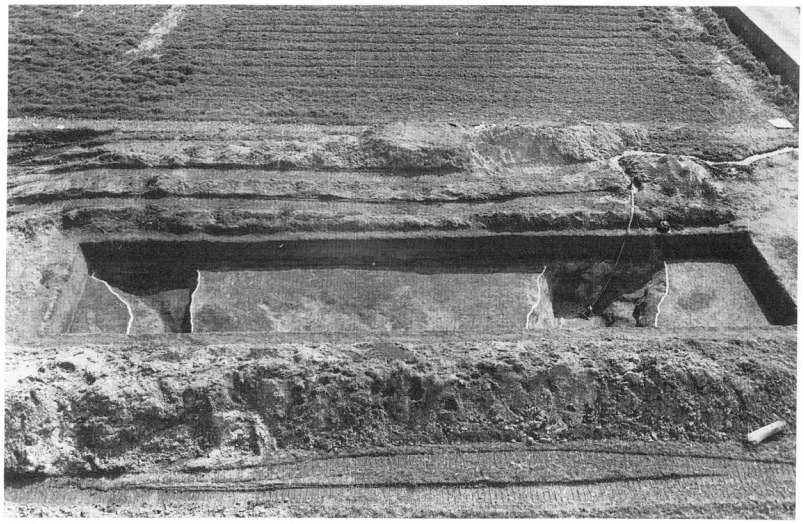
顕宗陵古墳
第2次調査
調査区全景
（北から）



遺物散布地
第1次調査
調査区全景
（北から）



ＳＤ－02・03
完掘状況
（北から）

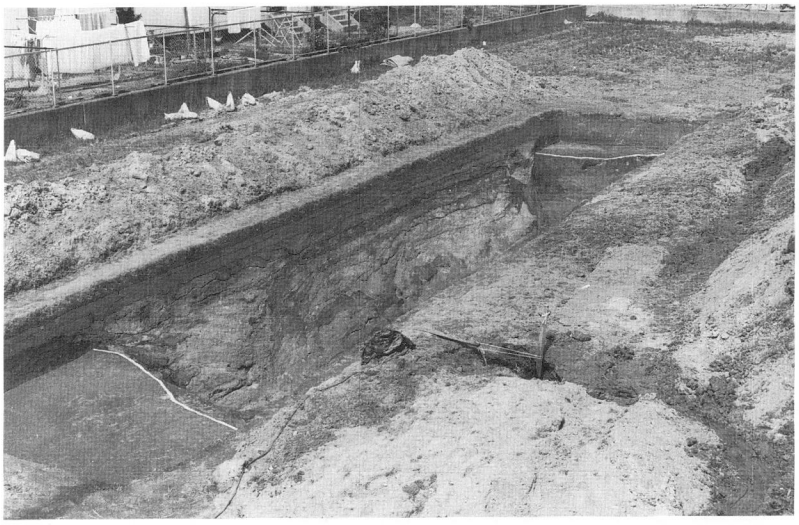


ＳＤ－02・03
完掘状況
（西から）

ＳＤ－01
完掘状況
（西から）

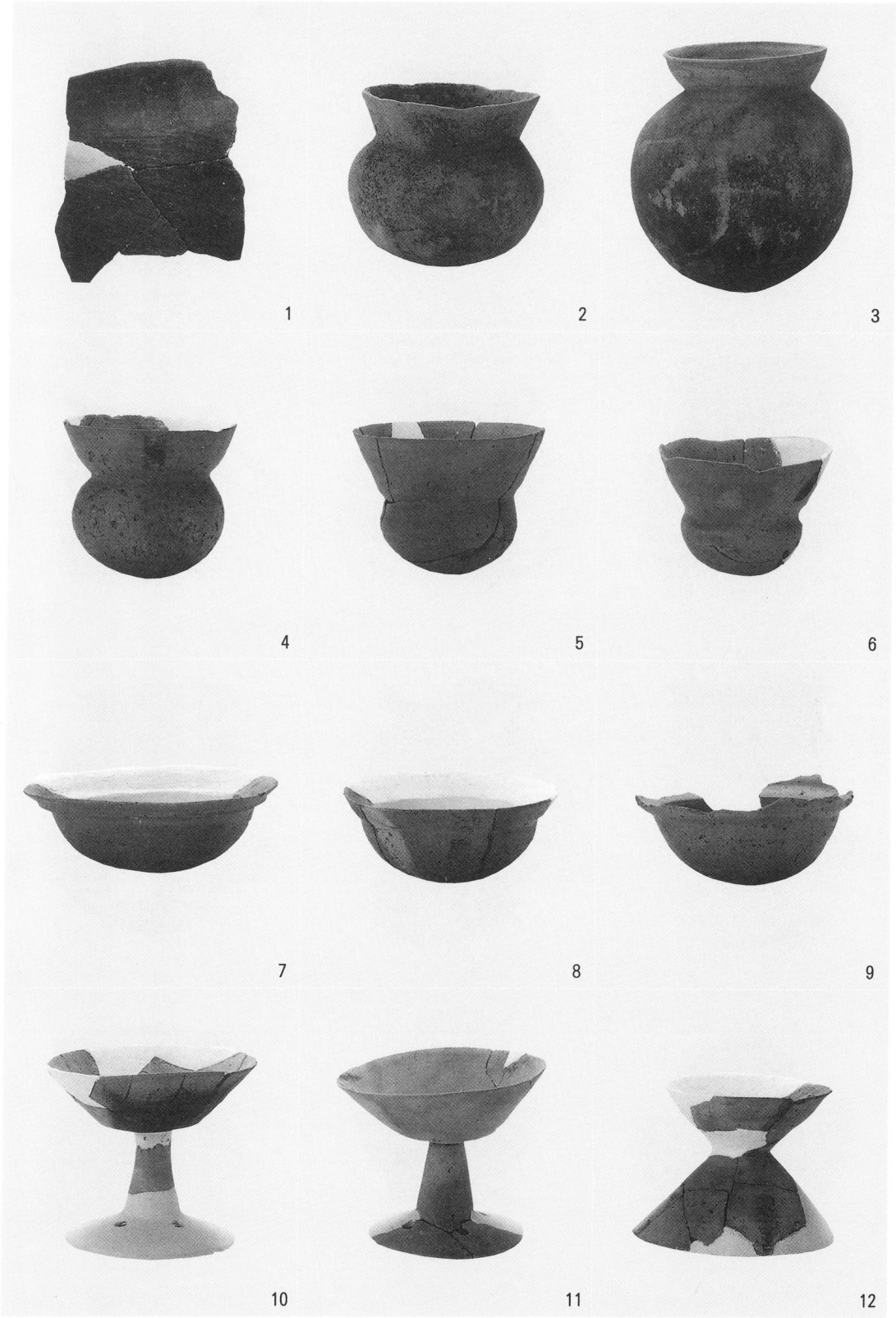
図版8　鎌田遺跡第8次調査　(2)

ＳＤ－02
完掘状況
（東から）



ＳＤ－01
土層堆積状況
（南東から）

ＳＤ－01上層
遺物出土状況
（北から）



1＝包含層　2・3＝ＳＤ－01最上層　4～12＝ＳＤ－01上層　(1)

図版10　鎌田遺跡第8次調査出土土器　(2)

13～24＝ＳＤ－01上層　(2)

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　4
— 平成６年度 —

編集
発行　香芝市教育委員会
香芝市本町１３９７番地

印刷　明新印刷株式会社
奈良市南京終町３丁目４６４番地